研究会報

No.13

マルクスと
アソシエーション

1998年6月

90年代の共産主義運動を考える研究会

目　次

労働者の闘いとアソシエーション論
阿部治正（ワーカーズ・ネットワーク）・・・

『マルクスとアソシエーション』まとめ　志摩玲介・・・・・・・・・10

マルクスとアソシエーションを読んで　早見慶子・・・・・・・・・19

阪神大震災に学ぶ ⑥　早見慶子・・・・・・・・・25

「マルクスとアソシエーションを読んで」　北村　裕・・・・・・・・・31

「マルクスとアソシエーション」（９４年新泉社刊　田畑稔著）を読む一
今村仁司「現代思想の源流」所収「マルクス一神話的幻想を超えて」
（９６年講談社刊　「現代思想の冒険者たち」００）を念頭に置きながら
畑中文治・・・・・・・・・37

田畑稔「アソシエーション論」について
マルクス再読の試みに学ぶ　津村　洋（「国際主義」編集会議）
・・41

個人主義・自由主義とマルクス主義　・・・旭凡太郎　・・・・・・・・49

労働者の闘いとアソシエーション論

１９９８年4月２５日
阿部治正（ワーカーズ・ネットワーク）

●左翼の挫折越えんとする試みのひとつ

バブルの崩壊以降６０兆円を超える景気対策が行われ、今また１６兆円もの大盤振る舞いが行われようとしているにもかかわらず、景気はいっこうに回復しそうにありません。それどころか、アジア経済の崩壊のあと世界経済の支えとなった感のある米国経済のバブル化、その失速、世界同時不況への突入の可能性さえささやかれています。ソ連圏の崩壊のあと我が世の春を謳歌するかに見えた資本主義経済は、しかしながらやはり利潤目当ての無政府的生産の体制の業病ともいうべき不況（恐慌）を克服することは出来ず、首切り、賃下げ、労働強化等でその危機を乗り越えようとしているのです。

ところが、この資本主義の未曾有の危機を前にして、社会主義運動はどういう状況にあるか。不信、権威失墜、怨嗟の声等々、率直に言って資本主義以上にひどい評価にとりまかれています。しかしそれは、ソ連などの野蛮で抑圧的で非人間的な体制を「社会主義」だ「社会主義に向かいつつある過渡期」だとして（「生成期の」とか「堕落した」とかの修飾語は付けつつも）持ち上げてきた罰であり、またその誤りを正しく総括していないことの報いです。

ソ連等は市場を軽視したから失敗したのだとして「市場社会主義」を唱道する議論も盛んです。しかし、これがソ連等には市場も賃金労働も利潤目当てに生産を行う企業も厳然と存在してきた事実（これら「市場」経済を国家が上から強力に統制してきた「国家資本主義」と呼ばれるべき体制であった事実）を無視した謬論であることはさておくとしても、最近のロシアや中国などの現状を追認しているにすぎず、私たち労働者にはまったく説得力も魅力も持たない議論というしかありません。

こうした中にあって、田畑稔氏らの唱えるアソシエーション論、マルクスの未来社会論を「アソシエーション」というキーワード（というより概念）で新たに読み解こうとする試みは、注目すべき議論だと思います。それは、かつて社会主義としてもてはやされたソ連や東欧、中国などの国家主義的で官僚主義的な体制への批判をさらに深化させていく上で、有益な観点を提供してくれます。またそれにとどま

らず、私たちが今日新たな社会の構想を押し進めていく上でも、重要な視点を与えてくれていると考えます。

●アソシエーションとは？

田畑氏によると、アソシエーションとは「諸個人が自由意志にもとづいて、共同の目的を実現するために、力や財を結合するかたちで、『社会』をつくる行為を意味し、また、そのようにしてつくられた『社会』」（『マルクスとアソシエーション』、以下引用文は断りなき限り同書から）を意味します。そしてマルクスが唱えた未来社会もまたこうしたアソシエーションとして構想されていたとされます。「諸個人が生産主体としても消費主体としても責任主体として『合意』形成過程に論争的に関与しつつ、生産の社会的再生産過程に対する主体的コントロールを確立すべきだとする、マルクスのアソシエーション理念……」云々というわけです。

田畑氏がいわんとすることは、マルクスが唱えた未来社会は何か私たち労働者の外にある、あるいは上にいる、国家なり組織なりエリート集団なりによって導かれたりコントロールされたりする社会ではなく、私たちふつうの労働者自身の自主的で自覚的な協同にもとづいて組織された社会、労働者たち自身が自己統治する社会、経済や社会そして政治がまだ必要な間はその政治もまた労働者自身によって担われる社会だということだと思います。

もちろん労働者自身による自己統治のちからが未成熟で未発展な間は、労働者の利益、社会全体の利益を体現すると称する組織なり集団なりが一定の役割を演じることは避けられません。田畑氏はアソシエーションの発展のそれぞれの過程におけるこうした「脱アソシエーション化」の必然性を確認するとともに、それを「再アソシエーション化」していく必要性を強調しています。

以上のような事情を田畑氏は次のように語っています。

「マルクスが言いたかったのは、資本によって『コンバイン（結合）された』労働者たちが、危機と闘争の中で、モラル的政治的成長をとげて、自己統治能力を展開し、単なる『コンバインドな』労働を『アソシエイティッドな』労働へと主体的に転換していくプロセスこそ、近代共産主義の基本内容をなす、ということ…」。

「マルクスでは、ブレーンとか党官僚でなく、あくまで『生産当事者たち』の『アソシエイティッドな知性』が『合理的プラン』という場合の『合理性』を支えるものと考えられていた。……もっとも『合理的』な選択を可能にする最終的根拠は、社会の上に立つ知的エリート（官僚や学者）の超越的理性ではなく、さまざま

なレベルでの『アソシエイティッドな知性』の下からの展開なのである」

「われわれが今日マルクスのこのモチーフを生かすとすれば、この過程を単線的に了解せず、アソシエーション過程のこれら諸段階において働く対抗原理を対自化しておく必要がある。…競争…、…委任（原理）…共同機能の独占に基づく権力関係…知識層による労働者大衆へのリーダーシップ…権力行使、官僚化と制度化がアソシエーションへの対抗原理として働くだろう」「アソシエーション過程としての未来社会への前進は、歴史的に正当な根拠に由来するこれら脱アソシエーション化の諸力を直視した上で、大衆の自己統治能力の歴史的展開に応じて再アソシエーション化していくプロセスとして了解されねばならないだろう」

●アソシエーションの拠り所

しかし「自由な労働者」「アソシエイティッドな労働」「アソシエイティッドな知性」「大衆の自己統治能力」等々が単なる理念や理想として言われるだけであれば、ありがたいご託宣以上の意味はないでしょう。田畑氏が積極的に明らかにしようとしているのは、むしろそれらが可能となる理論的根拠、その現実的よりどころです。田畑氏はそれらを「労働交換原理」「個人的所有の再建」などに見いだしています。

もちろん「労働交換原理」は分業と私的所有の下での商品交換（そこでは価値法則が支配する）とはまったく異なって、ここで交換されるのは労働の結果としての、労働が対象化された生産物・商品ではなく、労働そのものです。つまり一人一人の労働者が自らの労働を意識的、自覚的に社会的に支出し、その成果である総生産物の中から生産の更新に必要な部分と社会的に消費される部分（学校、医療保健、扶助など）を控除したあとの部分をそれぞれの持ち分に応じて分配するという形で、労働の交換が行われるということです。この労働交換原理が真実に貫徹すれば、そこでは一切の特権や差別は存在せず、ただ労働を基準とするすべての人々の平等、すべての社会成員の労働者としての平等があるのみです。

また「個人的所有の再建」と言っても、何も中世の小経営所有のようなものがふたたび打ち立てられるということでなく、マルクスが言ったように「資本制時代の獲得物にもとづいて、つまり自由な労働者の協業と、土地および労働自身によって生産された生産諸手段の、共同所有にもとづいて」の「個人的所有の再建」です。

マルクスがこの「個人的所有の再建」を論じた理由について著者は次のように言います。

「マルクスの文章をよく読むと、社会的生産手段と社会的消費手段のためのこの社会的控除も、あくまでも《各個人》が社会的総労働への『《彼の》参与分』から控除されたものであり、したがって『《彼の》労働の、共同社会的フォンドのための控除』なのである。つまり『社会的所有』の領域にも当然、労働交換の原理が介在してくる」、「こういう交換の原理が基礎にない限り、社会的生産や社会的消費は諸個人から不可避的に自立し、『社会的所有』への諸個人自身によるコントロールは、その論理的基礎を失うだろう」。「『個人的所有の再建』は……社会的生産手段、社会的消費手段、個人的消費手段、の全体に対する諸個人の関係を通して、諸個人が①自己労働にもとづく所有、②労働の客体的諸条件に対する主体的コントロール、③人格的自由や『自由な個人性』の対象的諸条件の所有、を実現しているあり方、として了解されねばならない」

●「個人的所有の再建」についてのもう一つの議論

「個人的所有の再建」については、田畑氏の意見もさることながら、経済学者の大谷禎之介氏が言っていることも非常に説得力があります。大谷氏は、マルクスの「１８６１―１８６３年草稿」の中にあるひとつの覚え書きを手がかりにこの問題を考察しています（『経済誌林』Ｖｏｌ６１、１９９４年）。以下かいつまんでご紹介します。

大谷氏はこの論文の中で、ここで言う「個人的所有」の対象は個人的生活手段といった特定の部分だけを指すのではなく労働諸条件、生産諸条件そのものであること、またそれは「個人的所有」というだけではなく同時に「社会的所有」ともなっていること、さらに「自立的個別性にある個別者」「個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態」がそのままの形で「再建」」されることはあり得ないこと等々を前置きしたあと、次のように論じます。

「それは、資本主義的私的所有のもとでいったん失われた、労働する諸個人自身の所有、労働する諸個人と労働諸条件との結合、労働と所有との統一が、協働連合的生産様式のもとで回復されるということ以外にはありえない。それはまさに『連合した社会的個人の所有』によって実現されるのである。この個人が『自立的個別性にある個別者でない者』である点でこの『再建』はもとの状態へのたんなる『復帰』でないことは明らかであるが、しかし他方で『資本家――非労働者――による生産手段の所有』の否定によって、労働する諸個人がふたたび生産諸条件を占有し所有している状態が再現するというかぎりで、それはまさに『再建』なのである。

このように見ることができるとすれば、『個人的所有』という語は、所有が『社会的』でなくて『個人的』だ、ということを言っているのではなくて、所有の主体が非労働者ではなくて労働する個人だ、ということを言っている、ということになる。要するに『個人的所有の再建』とは、『連合した、社会的な個人による所有』の再建なのである」

「『資本主義的な所有』から『社会的な所有』への移行とは、それ自体としては、『社会』なるものが生産手段の『所有権』を個々の資本家から奪うことではないのである。いわんや『社会』という名において『国家』が社会的生産手段を掌握することではありえない。……『事実上すでに社会的経営にもとづいている資本主義的所有』から、『資本主義的所有』の外皮を爆破して、その社会的経営を名実ともに『社会的経営』たらしめることである。そのために必要なのが、この『共同占有』にもとづく『労働者の個人的所有の再建』なのである」

（「国有化」＝「社会主義」論の誤りは）「より根源的には、『社会的所有』とは、本質的にはけっして、個人とは区別される『社会』なるものによる所有のことではないこと、実現されるべき新たな所有の要諦は『連合した社会的諸個人の所有』にあることに気づいていないところにあるのである」

なかなか明快な「個人的所有の再建」についての解釈ではないでしょうか。

●アソシエーションと「自由の国」

もちろん、マルクスが論じた未来社会は、労働交換原理が行われる社会にとどまるわけではありません。労働交換原理等の実現は確かに永く搾取と抑圧と差別の中にあった人類史における解放の巨大な一歩となるでしょうが、しかしこれはまだ物質的生産の領域を越えるものではなく、その内部での自由と平等と豊かさにとどまります。

早い話が、例えば高齢化や障害など何らかの理由で労働する力を著しく低下させるか失うかした人は、労働交換原理の実現にとどまる社会ではこの原理に基づく限りでの自由や平等の担い手たることは困難です。確かに資本主義社会でのような彼らを社会の厄介者視する動機はなくなり、差別され、抑圧され、排除されることはなくなります。しかし労働とその交換の担い手たる他の社会成員との違いは存在しており、その意味ではやはりまだ社会の真の主人公とは言えない存在です。

だからこそ（というよりもむしろ議論の必然的発展、合理的な推論にもとづいてなのですが）マルクスは、労働交換原理にもとづく社会を前提としつつも、その上

での生産力のいっそうの発展、労働時間の短縮、自由時間の拡大、精神労働と肉体労働、指揮労働と直接労働の分裂の克服などを基礎にして、やがて「労働時間が富の尺度であることをやめる」社会がやってくるだろうと主張します。労働がもはや労働としてではなく「活動そのものとして現象する」社会、「自己目的として広く認められている人間の力の展開が、つまり真の自由の国が、はじまる……」というのです。

労働交換原理にもとづく社会から、それを前提としつつ自己実現や自己享受が目的となる社会へ、労働者としての平等からそれを越えたよりいっそう人間的な社会、人間性の発展そのものが目的となる社会へ……。マルクスが語った「必然の国から自由の国へ」という言葉の内容と意味についても、著者は独自の、それなりに説得力のある見解を示しています。

●アソシエーションの今日的可能性

もちろん、田畑氏の『マルクスとアソシエーション論』の主な課題はマルクスを正しく「再読」することに置かれており、今日の資本主義の現実の上に立った実践的任務を直接に明らかにしようというものではありません。それは私たち労働者自身の課題です。

この点についていえば、田畑氏らのアソシエーション論を現にある消費協同組合や生産協同組合の運動、様々なボランティアグループの活動に引きつけて、それらを支える理論として歓迎する向きも見られます。しかし、これはいささか短絡的な理解であり、田畑氏らの「周辺的アソシエーション論」への批評と「過程的アソシエーション論」の提唱に沿った捉え方でも、またマルクス自身のアソシエーション論の提示する方向でもないでしょう。それに何よりも、現実的ではないでしょう。

今日の社会において、労働の社会化と普遍化、労働の機能の流動と転換、社会的な生産手段等々、アソシエイティッドな労働、アソシエーション社会への転換を可能とする物質的条件が日々発展しつつあるのは、この社会を根幹で支えている大小の企業の体制とその相互の連関の中でであり、その外でではありません。労働交換原理（一切の特権や差別の廃止と労働における平等）、個人的所有の再建（労働と所有との統一、労働の客体的諸条件に対する主体的コントロール、人格的自由の対象的諸条件の所有）は、それらを単なる言葉としてではなく現実化されるべきものとして考えるならば、その諸条件は今日の資本主義を構成している現実の企業体制、とりわけ巨大多国籍企業を軸に展開されている生産と流通の体制の中にこそ見いだ

されなければならないのです。

大小の種々様々な企業群、そして国境の内外に展開された巨大多国籍企業の諸工場群や諸オフィス群を、アソシエイティッドな労働とアソシエーション社会の拠点へと転換させること、それは可能であるだけでなく唯一の現実的な実践的なアソシエーション論であると考えます。日常の労働と生活の中では封印され、ベールに覆われ、その本当の可能性が明瞭には認識されにくくなっています。しかしこうした諸工場、諸オフィスの中にこそ、またそれらの相互の関連の中にこそ、そこで展開されている労働や労働組織やそれを調整する諸行為等々やそれを成り立たせている生産諸手段の中にこそ、アソシエイティッドな労働、アソシエイティッドな知性の実際的な根拠が存在しています。それをそれとして労働者自身の前でくっきりと明らかにし、それらを手がかりにして資本の支配に対抗するアソシエーションの芽を組織し、資本の干渉や抑圧との厳しい攻防をくぐり抜けながらそれを発展させていくこと、これが私たち労働者にとってのアソシエーションの実践だと考えます。

もちろん現にある消費協同組合、小規模な生産協同組合等々も、社会全体がアソシエーション化されて行く過程の中で一定の意義を有さないというわけではないでしょうが、しかしそれらがアソシエーション化の基本線であるかいう議論は、やはり現実から遊離しているといわざるを得ないのです。今日の資本主義を資本主義たらしめている根幹の部分においてこそ、アソシエーションを育み発展させる様々な取り組み、闘いを開始していく必要があります。理論と実践の交流を開始しましょう。

（以上）

『マルクスとアソシエーション』まとめ

志摩玲介／1998.5.22.

【本稿は、1997年11月７日の研究会に提出したレポートに加筆、訂正したものである。テキストは田畑稔『マルクスとアソシエーション』1994年、新泉社。】

《要旨》

「第４章　アソシエーションと『自由な個人性』」

① 本章は、「未来社会における『自由な個人性〔Individualität 個性〕』」を主題に「２」以下「交換論、所有論、労働論、人格論の順に追究する」。[p.165]

◆「１　『必然の国』と『自由の国』」 [pp.166-9]

② 『資本論』第３巻（ＫⅢ）第48章ー草稿をもとに「未来社会の、二次元的構成」を述べる。「必然の国」の自由は、１最小の力の支出、２共同のコントロールのもとでの自然との質料代謝、３アソシエーションという社会編成形態、が特質である。これを土台にした「自由の国」では、「自己目的として認められた、人間の力の展開」が自由にほかならない。双方の結節点は「自由時間」であり、このばあいの自由は、「必然の国」からみれば消極的自由だが、「自由の国」からみれば積極的自由である。

③ 一方、『ゴータ綱領批判』（ＧＰ）では、共産制社会の「初期の局面」では欲求充足手段の恒常的欠如などから「労働交換原理」が、「より高度の局面」ではかかる欠如などが克服され「自己目的原理」が規範原理とされる。ふたつの原理は実在性と理念性をそれぞれ体現して同時併存するものであり、「必然の国」「自由の国」の区分と交錯している。共産制社会が成熟すれば、徐々に労働交換原理から自己目的原理へ比重が移行する。

◆「２　労働交換システムとしてのアソシエーション」[pp.170-8]

④ 『経済学批判要綱』（Ｇｒ）から、α）共同体間の交換、β）全面的私的交換、γ）アソシエートしあっている諸個人の自由な交換、の図式をとりだし、交換が商品交換ー私的交換に限定されていなかったことを強調する。たとえば共産制社会の「初期の局面」での「自由な交換」は、「商品交換を……規制しているのと同一の原理」（ＧＰ）に支配される労働交換システムとして実現されるなど、その特徴が７点に整理される。もともと交換は人間の「個別化 sich vereinzeln」にとって決定的な意味をもっており（Ｇｒ）、それが「自由な個人性」の確立にもつ意味をさぐらなければならない。

⑤ 「交換」一般ではなくその歴史的一形態、「私的交換」による個別化は、「物件〔物象〕の共同存在」の成立を条件に、「自分を個別化されたものとして措定する」ことが目的になり、「自分を普遍化し共同化する」ことが手段になるような、諸個人の相互的ふるまいとしてあらわれる。ここにはふたつの契機がある。ａ各人が同時に手段であり目的である交換において、諸個人が個人としての自分を目的にして生活する（向自存在）という「相互性の契機」があり、それは未来社会にも共通する契機である。他方、ｂ「反省された特殊利益の契機」があり、「私的交換」のもとでは私的個人の特殊利益が交換の直接的動機であって、相互性は交換の事後に事実として確認されるにすぎない。

⑥ 以上をふまえて「自由な交換」における個人性の展開を基礎づける。１「諸個人は労働交換による利益の『相互的』実現のためにアソシエーションを組織」し、自由意志で他者と関係しあう。２「必然の国」では「諸個人は『交互性』を担う主体として、『向自存在』『自己追求』『目的としての個人』の契機を不可欠に持っている」。３「個人的利益は『交互性』のあらゆる侵害、交換的正義からのあらゆる逸脱に対して、つねに正当に主張され」、「相互的評価における主観的誤謬」（Ｇｒ）を「アソシエーテッドな知性」（ＫⅢ）によって是正する。４労働が「交換の根底としての『普遍者』」であり、「閉鎖集団化したアソシエーション」の解体、「アソシエーションに対する諸個人の規範的先在性」を根拠づける。５「初期局面」では、労働の交換が平等と自由の土台であり、法ー権利や正義の規範性がおおきな社会的意味をもつ。

◆「３　『個人的所有』とアソシエーション」 [pp.179-87]

⑦ 初版ＫⅠ（現行版第24章第７節）の「否定の否定」の三段階図式、α）自己労働にもとづく個人的な私的所有、β）資本制的私的所有、γ）「共同所有〔仏語版以降「共同占有」〕にもとづく個人的所有」、ならびに『フランスにおける内乱』

の将来社会構想を、個人的な私的所有というプレ資本制形態での「個人的所有」問題にポスト資本制の次元で解決形態をあたえるアソシエーション、と確認する。個人的所有は人格の「自由の外面的な圏域」（ヘーゲル）だが、資本の本源的蓄積過程で労働者がそれを喪失したのは近代の「原罪」であり、これを「再建」（ＫＩ）しようというわけである。

⑧　同時に社会的かつ個人的な所有説はあいまいだと批判したデューリングにたいし、エンゲルス『反デューリング論』は、消費対象は個人的所有、生産手段は社会的所有、という振り分け理解で反論した。そこでは、マルクスの個人的所有構想が消費手段にきりちじめられ改竄された。たとえば、小経営の個人的所有と資本制の「社会的所有」とをともに解決しようとするマルクスの二重の課題意識の見おとし。ＧＰの分配論では、消費手段に個人消費分だけではなく社会的控除分もふくまれていた。じつは「社会的所有」領域も社会的総労働への個々人の「持ち分」（同）からの控除部分でなりたっており、労働交換の論理が介在するのだから、「社会」が所有の自立的主体と化すわけではない。

⑨　マルクスの構想でほかに留意する点は、「個々人の所有 Eigentum der einzelnen」（ＧＰ）は個人的消費手段にかぎられ、それは「個人的所有 individuelle Eigentum の再建」（ＫＩ）にとって不可欠の契機ではある。しかし後者は、さらに社会的生産手段、社会的消費手段をもふくみ、１自己労働にもとづく所有、２労働の客体的諸条件に対する主体的コントロール、３人格的自由や「自由な個人性」の対象的諸条件の所有、を実現しているあり方である。また、土地にたいする「人格的 persönlich 所有」の回復は、自己目的原理による「個人的所有の再建」にもとづく。

◆「４　労働の『活動』への転化」　[pp.188-94]

⑩　Ｇｒの労働論を、α）たんに個別的な労働、β）たんに内的〔無自覚的〕ないし外的〔強制的〕にのみ普遍的な労働、γ）「直接に普遍的な、社会的な活動」、の図式にくくりだす。そして、資本により外的にたばねられた「コンバインドな労働」を「アソシエーテッドな労働」へと主体的に転換していくプロセス、源蓄過程で生産者から消失した「精神的潜勢力」（諸知識、洞見、意志）の再建、に注目する。資本の権力の二重性（物件的権力、知的権力）に対応し、アソシエーテッドな労働も、ａ労働組織における自己統治能力の展開、ｂ指揮労働と直接的労働との分裂の克服、という二重の性格をおびる。

⑪　ａ自由時間の大衆自身の領有による、「芸術的学問的淘冶」（Ｇｒ）と普遍的労働ー自己統治との好循環から「諸個人 Individuen の全面的展開」（ＧＰ）がすすむ。ｂ「普遍的労働」の展開にともない「直接的労働」が下位契機化し、直接的労働が機械の自動体系におきかえられ、そして「労働時間が富の尺度であることをやめる」（Ｇｒ）。以上、アソシエーテッドな労働の二重契機が展開する結果、「必然の国」と「自由の国」との抽象的対立がやみ、「豊かな個人性 Individual-ität は、生産においても消費においても等しく全面的であり、その労働は、だからもはや労働としてではなく、活動 Tätigkeit そのものとして現象する」（同）。マルクスの構想は、支配システムの巨大化を確認するだけにおわったウェーバー官僚制論とは対照的である。

◆「５　アソシエーションと『自由な個人性』」　[pp.194-206]

⑫　Ｇｒの人格論を、α）人格的依存関係、β）物件的依存にもとづく人格的独立、γ）自由な個人性、の図式にもとめる。α）は商品交換が未発達な社会における諸個人の依存関係である。そこでは、１諸個人が非自立的で共同体に帰属し、２自然に包摂された農業と、３共同体的な自然偶像崇拝を基盤に、４諸個人は、封建領主と家臣、領主と農奴、カースト成員など、人格的な諸関係の規定性のなかにおかれている。５この規定性は他の個人による人格的制限として現象し、６諸人格の上にたつ諸人格として社会的権力が存在する。７諸個人は狭隘な生活世界に生き、８個個の個人は自足的である。

⑬　β）は分業と交換が全面的に発達した社会である。１諸個人はユニヴァーサルな（現実的に普遍的な）物件的相互関連にくみこまれ、２社会関係は個人のための手段と化す（社会的原子論）。３交換ー社会的「綜合」がユニヴァーサルな諸関係の、また、分業ー社会的「分析」が個人の全面性の、それぞれ条件として形成される。４自然科学により自然像が脱神話化され、５貨幣ー到富欲求を動機とする勤勉という転倒形態で自由時間が社会的に蓄積され、６社会的諸関係が物件のもつ神秘的な自然的属性になるが、恐慌局面では構造の矛盾を露呈する。７コンバインドな社会的労働過程において諸個人は資本の物件的権力に服属する。８表層の自由、深層の物件的依存のもとで、支配ないし権力が自由な契約合意の結果として現象する（仮象的自由）。

⑭　γ）将来社会の「自由な個人性」は、近代のうみだした諸個人の積極面を地盤に、「人間がつねに生産の目的として現象する」古代人の「崇高さ」（Ｇｒ）を回復させるものとして構想される（否定の否定）。諸個人の対自然対他者関係の総体としての生活世界が経済学的技術学的タームで総括された「必然の国」と、それを土

台に人格論的タームで総括された「自由の国」とが時空間的に併存。諸個人は、「必然の国」では労働自身を自己実現（活動）の場に転化させるあり方をしめし、「自由の国」では「人間の諸力そのものの展開がこの総体性を、自己目的にしている」「生成の絶対的運動の中にある」（同）。

⑮　ここに「マルクスの人間存在論のテロス（目的）面が鮮明に語られている」。自由時間の拡大を基礎に追求される「実在的自由 reale Freiheit」は、科学、芸術、「魅力ある労働」（フーリエ）、休息、遊び、体育、談話などその形態は多様であれ、諸個人が「自己実現、主体の対象化」（Ｇｒ）をとおして自己享受（自己確証）するというあり方である。「《なにをおこなうか》によってではなく、その行為をとおして諸個人が《どういう価値を実現しているか》によって、『自由の国』が『必然の国』から分かれる」のである。

◆「注」　[pp.206-12]

⑯　止目すべき点のみ。注１（④関連）で、商品関係－市場の揚棄の是非を問題提起。注３（⑧関連）で、未来を実践的に構想される可能性ととらえるマルクスの「批判主義」を、宿命論的な“約束された未来”に偏するエンゲルスの「目的論的歴史主義」から峻別。注５（同）で、アソシエーション的所有とゲルマン的形態〔いわゆる分割所有権〕とを区別。注６（同）で、「初期局面」の現実的構成としては行政部分が労働交換システムにもとづかないことを注記。注７（⑪関連）で、「社会的に必要〔必然的〕な欲求の拡大」が「生産性の上昇」を下回ることが必要と注記し、生産力主義に歯止め。

《疑問点／検討課題》

▼〈個〉をあらわす言葉、「個々人的所有」／「個人的所有」について ―― ①⑨

「自由な個人性〔個性〕」をキイワードにマルクスの共産制社会構想を読み解いていこうとする田畑の姿勢には、ほとんど全面的に共感できる。スターリン主義体制が、経済的社会構成（資本制社会）を「新しい人間抑圧のシステム」としての政治的・イデオロギー的社会構成に暗転させて崩壊したのだとすれば、マルクスにおける解放の構想を、経済的社会構成から人間的社会構成へと世界史の転換をはかる意義（人間解放）を軸に、はっきりと継承、発展させうるからである。

それだけに〈個〉をあらわす言葉を明確にしておくことが重要だとおもわれる。大沢覚によれば「ドイツ語で個人を表わすことばに、individuelle，einzeln，persönlich，privat，jede，besonder，vereinzelt などがある」（『経済理論学会第45回全国大会報告要旨』1997年）というし、egoistisch，egozentisch などもわすれてはならないだろう。これらの意味を精確に理解するのはむずかしいが、人間が対他者（他の自己）と関係するとともに自己意識を分割し、こうして外延的ー内包的な諸関係のなかで自己とか個人とかを意識するので、具体的な関係からみられた〈個〉の規定性をさまざまに表現する言葉や概念ができあがる、ということであろう。だからどんな言語でもこういう複数表現があるといえる。

さて、本章の所有論にかかわらせていうと、Eigentum der einzelnen ／ individuelle Eigentum に田畑は「個々人的所有／個人的所有」の訳語を対応させるのであるが、『資本論の誤訳』1966年、青友社、などでこれに言及してきた廣西元信の所説とはことなる。廣西によれば、einzeln は「個と個の関係が別々のもの。個々別々の簡略語」として「個別（個別個人）」と訳し、individuell は「個と個を並べて個と個との関係を形象化したもの。各々、それぞれの意味……まだ別々のものではなくて、関連している」「ヘーゲル流にいえば、個別と団体とを媒介するもの」として「個々（人）」の訳をあて、さらに「両語は個人的 Persönlich という総称概念の中での開放的（個々的）と閉鎖的（個々別々）との差異ともなっている」ということになる（『マルクス主義の破綻』1985年、エスエル出版会、pp.32-3）。廣西が法学的観点にひきつけて問題をとらえるのにたいし、田畑の視角はこれとはちがうからなのだろうが、そうなると両語が「所有」にかかりローマ法ではまぎれもなく民法上の物権をあらわす概念になるので、こみいった問題になるだろう。マルクス自身がゲルマン法とローマ法のはざまで矛盾した言説をのこしており、この点はマルクス主義再構築のポイントのひとつになりそうなので、もうすこしかんがえてみたい（青木孝平『ポスト・マルクスの所有理論』1992年、社会評論社、「第Ｉ部」などを参考に）。

▼「二次元的構成」について　―― ②③

田畑は、マルクスの将来社会構想を歴史過程的にえがきだす伝統的マルクス主義の方法を徹底的に排し、共産制社会の「二次元」を時空間的併存の論理で再構成してみせたところに特徴があろう。つまり、エンゲルスの「目的論的歴史主義」の限界を指摘した（⑯）ことからもうかがえるように、スターリン主義において全面開花する“千年王国”的な宿命論的歴史観とするどく対立する内容になっており、そこは十分に評価できる。この思考態度の妥当性はまた、主として本書第３章にみられるように、いわば“目的としてのアソシエイション”にかたよることなく“過程としてのアソシエイション”に力点をおき、実質的に、政治の内実を社会的－文化的に豊かにしてゆく過程性を重視することによって、政治革命先行説や粗野な共産

主義を超克する指向性にもしめされている（今村仁司のアソシエーション論批判は、せいぜい目的論的な青写真主義にたいしてあてはまるにすぎない）。

とはいえ、「自由の国／必然の国」と「初期局面／高度局面」の「交錯」のさせ方に疑問がのこる。なぜなら、ＧＰの「初期局面／高度局面」区分は、党綱領草案への批評ということもあって、実践的方向づけを歴史過程に即する形式で提起しているとかんがえられるよちもあるからである。すなわち、純理論風に叙述されたＫＩの「自由の国／必然の国」区分が時点ゼロにおける構造区分（構造系）だという解釈で田畑と共通できるが、ＧＰの区分は歴史的区分（歴史系）の水準でみるよちがかなりあるとおもう。そこで、歴史系と構造系とをくみあわせると、「自由の領域／必然の領域」は「初期段階／高度段階」のいずれにも重層化されており、「労働日の削減〔短縮〕」＝「自由時間」拡大が移行のテコになる、と整理できよう。

ここまでは田畑の見解とあまりちがわないが、田畑のばあいには、商品交換ー市場交換をともなう労働交換原理ーシテスムをくみこんでモデルをたてたので、「市場社会主義」にすりよりすぎだという印象をわたしはもっている。共産制社会における市場存続ないし「必然の領域」の混合経済化の是非は、過渡期社会における市場揚棄の実験にふまえて社会的かつ歴史的に選択されるべき問題だとわたしはかんがえるので、田畑のようにあらかじめその存続を前提視したくないわけである。

▼ 「交換的正義」について —— ⑦〔略〕

▼ ＫＩ「否定の否定」について —— ⑧

この文言の解釈をめぐって、平田清明らと宇野学派などとのあいだで広範な論争があった。おそらく今後もいろいろな解釈が提示されるはずである。本書は、この問題をアソシエイション論につなぎ、その視点から一貫した説明をあたえた点に意義があるだろう。

かつての論争のなかでは、マルクスの未来構想が世界史を逆進するものであるかにとらえられ、その遡行の到達点が、原始的（本源的）蓄積過程で解体された独立小生産者「社会」なのか、古代ギリシア・ローマのポリス社会なのか、という不毛ともおもえる議論があった。田畑のばあい、マルクスの「批判主義」の方法（⑯）に徹して、近代的個人性の積極面に軸足をおいたうえで、古代の人間観と近代初期の「個々人的所有」とを統一的に揚棄する道筋をしめしている。これはけっして世界史の過去の諸断片からいいとこどりしたものではない。〈歴史的時間〉（歴史的事実が成立する順路を規制する時間）において生起した問題群を、〈概念的時間〉（可能性ー実在性ー蓋然性という論理の順序を規制する時間）における問題系にくみたてなおしているのだ、とわたしはうけとめる。

▼ 脱労働ー労働廃却論について —— ⑪

きわめて重要な論点になるとおもわれる。〈労働／仕事／活動〉の区別と連関をはじめて明快にしめしたのは、Ｈ．アーレントの『人間の条件』（原著1958年）1994年、ちくま学芸文庫、であった。この書は、人間の肉体的な生命維持のための行為様式としての「労働」、人間が理念を対象化し人工物の世界を形成する行為様式としての「仕事」、人間が他の複数の人びととの関係性において成立させる自発的な行為様式としての「活動」を区別し、近代社会が「労働」優位の社会に歴史的に変質したことをうきぼりにしてみせた。田畑にあっては「仕事」の位置が明確ではないが……。アーレントがハイデガー学統の人物であるせいか（ただしユダヤ系ドイツ人だった彼女はハイデガーとはことなり反ナチスの実践的態度をしめした）、左翼はあまり引用したがらないが、Ｊ．ボードリヤールや今村仁司らが依拠しているようなので、そのあたりもふくめて今後、検討してみたい。

▼ Sache の「物件」訳その他について

１本書では一貫して Sache，sachlich が「物件」「物件的」と訳されている。たいていの独和辞典にでてくるが、法的な脈絡ならそれが正訳。じじつ、ヘーゲル『法の哲学』では、「人、人格 Person」との対比で Sache が「物件」と訳されている（藤野渉訳、中央公論社）。しかし、本書で引用されるマルクスの語用法は一般的、多義的であり、「物象」「物象的」もしくは「事物」「事物的」、脈絡しだいでは「事柄」のほうがいいようにおもう。ただし、概念内容をめぐる論争をよく検討しておらず、まだ断定しないでおく。

２ p.168，1.10　b|rgerliche Rechtshorizont「市民的法の地平」（ＧＰ）はふつう「ブルジョア的権利の地平」と訳される。けれども文法的には、bürgerliche は Recht にではなく Horizont にかかり「権利の市民的地平」となるのでは？

３ p.171，1.13　genossenschaftlichen「協同組合的社会の」（同）の Genossenschaft にかんし、『季報　唯物論研究』No.61（1997.7）誌上で、Assoziation との同義説（大藪龍介、植村邦彦）と相違説（村岡到、廣西元信）が紹介されており、田畑は同義説であろう。Genossenschaft にはほかに、組合、産業組合、同輩関係の組合、仲間団体などの訳語がある。

４同 1.14-5　besessene「所持する」（同）訳は非常にまずい。besessen は besitzen（占有する、もっている）の過去分詞で、引用文の脈絡では日常語としてつかわれているから「もつ」「有する」が正しい。民法の専門語としては「占有 Besitz」と「所持 Innehabung」とは明別される。自然生的な固有の力の「把持（握有、握持）」、自然生的な力を自己管理する能力、権利たる「所持」、所持能力によって物（物件）を利用、収益することが「占有（権）」、物（物件）を媒介とする人と人との意思関係で相互確認された占有果実のピンハネ権が「所有権」（廣西

「『資本論』を否定したマルクス」『現代と展望』No.36，1993年）。蛇足だが、「所持、保有は占有の前提となる」（廣西「マルクスを超克する法」『季節』No.10，1984年）という箇所は、「保有 Behalten」が所持と等置されているようによめて、その固有の意味が不明であろう。

マルクスとアソシエーションを読んで

早見　慶子

はじめに

マルクスの共産党宣言以来、世界各国で共産主義運動が展開され、ロシア革命を発端としながら、労働者たる民衆の解放は各国の革命の後続によって明らかかのような幻想を多くの人々に与えることとなっていった。日本の左翼も共産党から始まり、さまざまな新左翼を形成しながら、まさにその一中間点にいるかのような使命に燃えていた時代は記憶に新しい。しかし、ソビエトの崩壊や東欧諸国の崩壊、キューバや北朝鮮の問題などをみるにつけ、単なる観念的抽象論ではやっていけなくなったのは事実だ。ソビエトや東欧諸国に見られる官僚主義や警察国家の台頭は決して民衆の立場にたった理想を体現しているものではない。私はこうした現実を見るにつけ、マルクスの理論の人間観、社会観にひとつの限界を感じるものであるが、左翼運動を長期に渡って担ってきた活動家やイデオローグにとっては、まだ活力にみちた教本として横たわっているようである。この本の著者、田畑稔さんもマルクスのアソシエーションにまだ応用可能な希望を抱いているかのようである。確かにマルクスの著書はきわめて論理的であり、その根底にはヒューマニズが存在しているのがわかる。それは人間の幸福を望む慈愛と、不正義を許さない過激な野蛮性が同居しており、そのことがヘーゲルのすぐれた哲学観や歴史観よりもアクティブな魅力をつくりだし、煽動家としての存在を不動のものしたのは確かであろう。彼は理論家でもあるが、やはり煽動家だと思うのである。

だから、私と田畑さんの見方にはかなりのずれが生じてくるものである。彼は経歴をみても社会のブレイン的な仕事を専門にしているので、あまりサラリーマンや主婦の世俗とは無関係に生きてきたのではあるまいか？もちろんマルクス主義を語りながら、マルクスを理解してないどころか、あまり本を読んでない人が多いなかで、彼はよく研究していると思う。しかし、私はやっぱりマルクスの人間観のように歴史が進まないことを認めることからしか出発しないと確信する。なぜなら社会主義諸国の建設はうまくいかなかったわけであり、それを後続の実践家の責任にするのはきわめて観念的である。科学の仮説と実験の関係で思ったようにいかないのは、実験を担当する者は仮説のたてかたにしたがるし、仮説をたてた者は実験の仕方に問題があったと考えたりしがちな傾向をそのまま反映しているように思う。マルクスは主に仮説をたてた方なので、理論家たちはマルクスは正しいが、革命家た

ちが歪めていったと思うだろう。しかし、そうで単純ではないと思うので、マルクスのすぐれた社会観を補っていくものを私たちが、創造し、実践し、修正していくのが、元来の正直な生き方ではないだろうか。反省し、修正することは、裏切りだとか、意志薄弱なことではなく、正直に自分の分析が不適格であったことを認める勇敢な行為だと思う。では、本論に入りたい。

1　労働者による組織は自由な連合なのか？

社会主義を標榜するにあたって、どのような社会建設をするのかを当然のことながら考えるだろう。そして社会共同体としての基礎になる単位をブルジョア的アソシエーションから、労働者の自発的アソシエーションに移行し、そこでは諸個人の自由意志にもとづきながら、社会性をもった連合のような基礎を模索している。もちろんそのこと事態はひとつの仮説であり、そのように組織されていけば、確かに労働者の解放はかちとれて、自由と共生の社会へと進んでいたのかもしれない。しかし、マルクスはそうした諸組織の活動を支えるのは物質ではなく、心を持った人間であることを捨象してしまったようである。産業革命のまっただなかにあって、人間が金銭関係による単純な関係で環境に依存しているかのような機械論に陥っているふしがある。もちろんマルクスの哲学観はそれなりに社会を洞察していることは間違いないが、近代哲学が産業革命の発展に基づく、数学や物理学、化学などの進歩と一体であったせいか、人間や社会を法則としてとらえようとする傾向が強い。近代においては人間を自由な存在として哲学するより、ある限定された存在として言い放っているようだ。その流れのなかで人間機械論もささやかれ、コンピュータの発展に伴い、コンピュータを脳に内蔵したサイボーグかのような理解の仕方も定評があるようである。

しかし、人間には心があってそう簡単な法則にあてはまるものではない。だから私はマルクスよりもプルードンやバクーニンのほうが人間をわかっていたような気がするのである。田畑さんの著書でひきあいにだされたバクーニンの言葉はそれなりにおもしろいのでひきあいにだそう。「彼ら『マルクス派』はいう。かかる支配のくびき、独裁は、完全な人民解放に到達するために必要な移行手段だと。無政府ないし自由は目標で、支配ないし独裁は手段だと。かくて人民大衆の解放のために、まずは人民大衆を奴隷化する必要ようがあるというのだ。われわれの論難はこの矛盾をついている。彼らは主張する。独裁、結局のところ彼ら自身の独裁、のみが、人民の自由を基礎づけることができると。われわれは答える。どんな独裁も独裁そ

のものを永久化すること以外の目標を持ちえない、独裁はそれを耐え忍ぶ人民の中にたんに奴隷制を育むに適しているのであって、自由はただ自由によってだけ、つまり人民全体の立ち上がりと大衆の下から上への自由な組織によってだけ、創出されうるのだ、と」

田畑さんはスターリン体制のことにむすびつけ、評価を呈しながらも、マルクスの理論のほうに傾斜しており、元来の理論では独裁から国家の死滅にいたる階梯にまだ希望をたくしているかのようであるが、べつにスターリンに限らず、独裁者はいたるところにうず巻き、一人の人間が死ぬまで国家を支配するという事態をつくりあげていったのは社会主義諸国である。そしてかつ崩壊したことは何を物語っているのだろうか？それは安定していたのではなく、民衆が忍耐していたにすぎなかった。このことは独裁者は権力にしがみつこうという人間の習性をよく現している。日本にある左翼を見てみよう。共産党から新左翼にいたるまで、トップは一人の人間がつとめ、中心にいるのは高学歴の男性がほとんどである。労働組合もひとつの組合幹部のための組織以外の何者でもなくなっているので、労働者も自分の解放のために組合に入りたいとは思わなくなってきているのが現状だ。

このことは何を意味するのであろうか？バクーニンのすべてが正しいなんて言わない。しかし独裁に対する理解の仕方はバクーニンのほうが人間を洞察した目で語られていることは事実である。今や、既存の集団はトップの支配による組織拡大闘争へと成長し、自分たちの組織の正しさを強調する運動へと変化し、集団の利害関係がぶつかりあったり、無視しあったりしている光景はかつてはよく見られた。一人一人の人民に対する自己犠牲的精神をこのような方向で取り組んできたのは私も例外ではない。厳しい読み方かもしれないが、マルクスは「マルクスの思想こそ進歩的であり、この法則を実行するのを妨害するのは反動であるから、そのためには暴力の行使をもやもえない」としている。もちろんマルクスの生きていた社会は、政府に反対する人間を暴力によって弾圧ことが状態化してわけで、きわめて根拠の存在する理論展開であることは間違いない。しかし、組織として暴力をもつことは暴力機関を残そうとする権力の意向がある以上、破壊活動をなくすのは難しい。それに権力をとらなければ社会が変わらないというのは長期的に見ればそうかもしれないが、やはり権力を取ろうとする闘いは、権力欲に満ちた人志が集まって権力のもつ支配の強さを強調しやすいものである。また大衆に対して、あるいは、金持ちの人間に対しての差別の感情をもちやすい。つまり大衆をアジテーションでは中心的存在として語りながら、実際は自分たちのほうがすぐれているというタテマエと本音の異なる二重性をもっていたりする。

また革命期にあっては強いほうになだれこむ人が多く、一か月前は政府の味方で

革命の間際に革命軍につく人々は圧倒的多数である。人間は一部の思想家や革命家を除いて、安定や平安を求めるものであり、強い方に味方をしたほうが得であることが直感的にわかるので、そうなっていくのである。そのことをノンポリだとか自立してないだとか、臆病者と呼ぼうが、まず生きることが第一なのだから、まったく自然な現象である。さらに革命後の労働者独裁における人間の規範とは、生き方を通じて学ばれるものであるため、理論的に説得できるものではない。権力をとった独裁者が反対意見を暴力によって押しつぶしていくとしたら、それはすでに同じようなことを民衆も学び、あるいは傷ついて、その政権は終止符を打たざるをえないことになる。にもかかわらず、マルクス主義が、現在においてもそれなりの信奉者を出しているのは、非常にわかりやすいからであろう。その歴史観は西洋哲学の善悪二元論に基礎をおいているように思う。

2　階級闘争に見られる二元論と現実

西洋哲学の歴史はギリシア哲学から始まり、観念と現実、禁欲と快楽、善と悪などの対立物の議論により、人間の認識を発展させてきたと言える。このことは人間が思惟することを覚え、存在することの意味を思考するようになり、自己を知り、存在を理解するために必要な行為であっただろう。人間はあるがままに生きていると、その状態のことを疑わない。病気になることによって、健康を意識するし、川の水があふれて、気候の安定のありがたさを認識したりする。貧しさによって、食べ物のありがたさはわかるし、虐げられて、人の優しさを実感する。この精神の内的な成長にとって対立物の想定は必然であり、暑い一寒い、固い一柔らかいなどの概念の違いを通じて、人間は自然やおのれを認識していく。だから自然を見てるとか、ずっと自分とつきあってきたといっても理解しているわけではない。マルクスはこうした対立物の概念的把握を賃労働と資本という対立関係を想定し、過去の歴史も封建地主と農奴、主人と奴隷というように常に闘争し続ける関係性かのように表現してきている。確かに人間の認識が対立物の想定を通じて高まっていく存在ならば、人間が敵を想定することによって自分を成長させようとする行為も現実に存在するであろう。

しかし、自分のことさえ理解できない人間に労働者が経済的対立の概念から、感情を決定し、資本家と闘うのが自然かのように捉えるのは過ちであろう。尊敬する経営者もいれば、イヤな同僚に口を聞きたくない人もいる。党組織のなかにも幹部と活動家の対立は存在するし、企業家同志の対立も存在する。人間の怒りを無理や

りひとつの方向に流しこむのは単純すぎる人間理解であり、歴史の真実をうやむやにしているところがある。もちろんマルクスの資本論は経済から分析した人間や社会の見方を的確に分析しているだろう。きわめて整理された理解の仕方である。しかし、人間は文化的動物なので、習慣の違いや、言葉の表現の仕方によって人間の好き嫌いができてしまうほど、精神的であったりする。そのため、さまざまな分野から分析して、初めて人間の不満の実態がつかめるのであり、人間の存在自体に善悪をあてはめるのは危険である。確かに集団の結束をはかるためには、外に敵を想定することは、昔からやられてきた手段である。しかし、実際に存在するのは普通の人間であって怖い上司でも子煩悩のパパなのかもしれないし、存在しているかぎり、その人は社会にとって必要であり、何らかの役割を果たしているのである。故に現実の人間に善悪かのような区別をするのは危険であり、常に大切な存在として理解できる心の広さを人間は獲得しなければならない。人を傷つけたり、暴力に訴えなくても社会は常に変化し、人間も成長するものである。だから、概念把握のための対立物の想定を人間社会に無理にあてはめて、対立する存在を敵とみなして、殺しても社会の進歩に役立つかのような発想は生命の尊さを軽視し、差別を生み出す根拠になると思うのだ。対立する存在は一方で自己の成長にとって必要な存在であり、共生の対象であることを私は強調したい。

3　どのような共同体にむかっていくのか？

田畑さんのアソシエーション論のなかにマルクス理解にしたがって必然の国から自由の
国へ、という理想が展開され、生産力の発展によって人間の労働時間が短縮されるかのような仮説を前提にしているふしが見られる。しかし、どこまでが必然的労働だと誰が決めるのだろう。もはや衣類は寒さを防ぐためから、ファッションを楽しむために変化し、時計やバッグ、靴下からアクセサリーまでコーディネートされた時代である。髪を茶色に染めたり、パーマをかけるのは遊びであって必然ではない。本やＣＤは市場にあふれ、コンピュータは進化しながら、オフィスでも時折、買い替えられていく。人間に欲望がありつづける限り、生産力は永遠に発展し続けなくてはならないかのようである。しかしもし、住居の壁もインテリアも政府で単純なものに決め、服も何着かがあてがわれて、使い古してからでないと新しい服が支給されなかったとしよう。そういうなかで人は満足するであろうか？そう、人は遊びも満たされなければ生きていけないのである。もちろん今の私たちは、ぜいたく病

に侵されており、このまま放置すれば地球環境はますます悪化の一途をたどることになるほどである。これはなんとかしなければならない問題だ。しかし、それは共産主義を信奉するものが権力を奪取することによって、解決できるものではない。つまり、単純な二元論を経済という範疇の限定を越えて、社会に共産主義思想が適応できるものではなく、さまざまな要因の解決を通じて少しずつ変化し成長するのが社会ではないだろうか？

私はこの社会を断言できるほどの立派な人間ではない。それでも現実を見ていった場合

、システムとしての効率性と人間性がかみあわなければ、人間の精神は満たされない。生産力の発展は効率のよい商品の生産を人間社会のもたらす。しかし、その一方で冷たさを感じ不安になるのが人間である。高齢者や障害者を病院で管理したり、ホームに入れたりして、健康を保証するシステムは必要であろう。しかし、病院やホームに入れられるものたちは家族や愛するものたちから引きはがされる苦痛を味わう場合もいっぱいある。家族は病気で倒れた老人の面倒を見たくないし、ときどきボランティアがきても日常的な介護ではないので、寂しさは病人の中で成長し続けるだろう。これをただすのがモラルであり、哲学や宗教であったりする。マルクスの書物は人間の生き方や人の愛し方まで語ってはいない。現在は宗教が代行しているのが現状で、家庭の悩みや不幸を越えていく勇気を提供している。私は大きな意味で効率ある運営を政治家や経済学者、法律家などが責任を持ち、モラルを体現できる人間が組織指導を担うべきだと考える。それでは今でも少しはできているのでは？と思う人もいるだろう。しかし、まだ日本人のぜいたくは南北問題の現実を創造しているわけで、広い視野を持たなければ自分たちの存在を客観視することは不可能である。そのためには永遠の挑戦と学ぶ姿勢が必要であり、まず、自分自身の実践から始まるわけで、政府に期待するだけでは、自己成長さえできないであろう。

それ、革命まで闘うぞ。

阪神大震災に学ぶ⑥

早見　慶子

さて、作戦計画はそれなりにうまくいったようだけれど、慶子の調子がでない。えっ？やっと自分の顔を鏡で見て、若い自衛隊をオルグする自信がなくなったのかって？まさか思い込みの激しい慶子にそんなことがあるはずありません。実は昨日飲みすぎちゃって、私頭が痛いんです。それで、文章を書こうとすると吐き気とこめかみから頭にかけてずきんずきんするんで、いいアイデアが浮かばなくって・・・えっ？また何か言った？早見の文章はこれまででも好きなこと勝手に書いてえらく人のことをバカにしおってそれで頭を使ってきたのかって？それはひどいセリフじゃない。だって今までに革命おこした日本人って戦後は吉里吉里人だけしかいないのだから、革命を成功に導くってとても大変なんだから。でも想像の中でのメンバーはまだ素直でいいわ。だって変な替え歌をまじで歌ってくれたり、とても恥ずかしくて着られないようなパステルカラーの制服着てみたり・・・

実際にこの世にいる革命家はそんなチャレンジもしてくれないおじさんなんだから。でもそういうグチはよくないわね。だって私だってこの年で変な服着て歩いて、松ヤニを顔につけて街を歩きたくないわ。でもこんなストーリーが出てくるのも革命家たちの潜在意識にどこか、現実をはみだして冒険をしたい心が残っているせいよ。さあ、みんな羞恥心や自意識をとっぱらって新しい価値を求めて飛び出していこう。

さあて、いよいよ自衛隊の駐屯基地の前に接近し、近くの酒場に来る若い男たちの待ちぶせにむかった慶子。自衛隊といってもいろいろいる。様子をうかがっているが、髪の薄くなったおじさんから、若くてちょっといい男まで千差万別だ。どうも中年の自衛隊の人たちは結婚して、子供もいて厳しい訓練をしてきたせいか、ナンパしようと待ちうけているギャルには興味がないようだ。オウムの例もあってか、ちょっとした甘い誘惑に誘われて、社会的地位を失うことを考えると堅実な道を進もうとするらしい。ところがどっこい若い自衛隊は違うみたい。やっぱりホルモンが活発なせいか、そういった隊の規則にあきあきして、女性に弱い人もいっぱいいる。彼らの動く視線を観察してみるとよくわかる。おおざっぱに二つにわかれる。片方は、「おれは自衛隊という国を守る兵士なんだ。女子供にはわからぬ命さえかけた任務なんだ。これぞ日本男児の誇りというものよ」とつっぱって女たちのほうは意識して無視していくタイプ。もう一方は、「こうまで規則規則じゃおれたちまいっちゃうよ。まもらなければ罰則もあるし。いまどきこんな職場ないよな。まだ

かわいい子でもいりゃ、たえられるけれど、女の子なんて全然いない男だけの砦だろ。ちょっと外へでたときは、女の子をくどくチャンスだ、がんばろう」と言っては女性の方ばかり視線がいく。

そう、口説くなら後者のタイプがのる男たちである。おっ来たぞ、来たぞあの肌の色が黒く日焼けしたちょっとかわいい顔の男の子。うん、私のタイプにぴったりだわ。ちょっとしゃれた「ケント」という酒場に入っていく。しめしめ、私も入ろう。そこでは音楽がジャズバラードだ。昔の左翼はときどきジャズ喫茶に通ったという話をきく。それにしては何故今こんなおじさんなんだろう。どうみてもジャズを聞きながら、ウイスキーやバーボンをたしなめる雰囲気ではない。もしそんなムードをもった人をさがすなら、この革命ごっこにきわめて冷たい視線を送ったS氏とK氏の二人ぐらいだろう。ちょっとばかりまともな人はこんなこと考えないのかもしれない。屈折して社会を嘆き、満たされない心をジャズとお酒でなぐさめながら、どこか社会の主流からはみ出し、孤独な自己に徹して、人ともたれあうことをひどく嫌う。うん、はっきり言ってダンディな男を演出しているのだ。そこへいくとこの革命ごっこに参加するおじさんたちは違う。最初から最後まで脳天気に自分たちの勝利を信じて疑わない。今革命が起こらなくとも、いつかマルクス＝レーニン主義のもとに大衆が結集して革命が起こり、自分たちの正義が証明されるその日が来るはずだと思っている。そう、信じるものは救われるとはまさにこのことである。たとえ現実がどうであろうとも、彼らはいつも勝利するその日を頭に浮かべている。だからこうしたチャンズにはすぐのってしまうのだ。彼らはやっぱりジャズよりもちびまる子ちゃんの替え歌が似合っている幸せものに違いない。うん、だから私も楽しくつきあえるのよ。アッハッハッハ。

さて、そこ酒場で目当ての男性の横にすわってみる。「ねえ、いつもこの酒場に来るの？私に一杯おごらせて。」このとき、一杯おごってと言えないのがおばさんの弱みである。たいていただで飲めるなら男たちはあまり断らないことを知っている。「い、いえ僕は一人で飲むのが好きなんで。」何故だろう？さっきのチェックでは、女性に視線をむけるナンパボーイのはずだったのに。私の美貌をもってしてなぜ断られるの？それにドグターパイプマンの指示どおり、しわもかくしたはずだし。そうだわケムケムリを吸ってもう一度チャレンジしてみようかしら。「ねえ、あなた自衛隊でしょ。とても大変で男らしい仕事だわ。その活躍ぶりをちょっと聞かしてくれない。それは誇らしいことよ。」とケムケムリに火をつけたからさあ、大変だ。酒場は一瞬のうちに煙につつまれ、火災探知機にまで反応してしまい、お客は火事かと思ってあわてて飛び出していった。私もわけがわからず、飛び出していったが、ケムケムリをくわえたままなので、歩くあとに煙がたちこめ、ようやく

お客も落ち着いたようであった。私もお客のあとに続いて店に入ろうとしたが、「お客さん、変な化粧して、煙をもうもう出していたら、うちに来るお客が減っちゃうじゃありませんか？今日のところはおひきとりをして下さいよ」と言われてしまった。

何故なんだろう。いったい変な化粧って？と思ってよくよく鏡をのぞいてみると、確かに変だ。ドクターパイプマンに言われてつけた松ヤニがその原因のようである。念入りに目尻から目の下、額につけたからそこに誇りやらとんできた小さな虫やらが、全部吸着されていた。そう、まるでお化けのようだったので、酒場に入っていっても誰も何も注意しなかったようである。そう、もしちょっとばかり口紅が歯についてしまったりしたら、「ちょっと歯をふいた方がいいですよ。」と注意もするだろう。しかし、今の慶子は昔のはえ取り紙じゃないけど、無数に虫やほこりがついているのである。こういうゲテモノはきっと何かの不幸があって突然頭がきれたんで、あまり声をかけるととんでもないことになるんじゃないかという恐怖が、慶子から人を遠ざけていったのだった。

どうして。私だって人間の心を持った乙女よ。これはあんまりだわ。みんなわかってるのかしら。人の顔だけでそこまで人を無視し、ゲテモノ扱いする。一体私が何をしたっていうの。お店にはいって、いい男に一杯おごろうとしただけじゃない。どんな人間だって、私のように松ヤニを顔にぬって街や自然のあるところを歩いていればこういう顔になるのよ。顔なんて年とともに醜くなるものだわ。でも魂は違うはずよ。なんで人間ってこうまでかっこよさや表面だけにこだわるのかしら。ひどいわ。と思いながら涙をながしていった。その時目の下についていた虫が地面に落ちていった。もう飛ぶ気力のない虫。私は自分のしわをかくそうという虚栄心が一匹の罪のない虫を死に巻き込んでしまったことを知った。虫さんこめんなさい。罪悪間にかられながら何故しわを隠そうとしたのっかていう自分の心をさぐると、若い男をナンパしたかったていうおばさん心からなのがわかる。そう、私は自分のゆがんだ心によって人から笑い者にされただけなんだわ。まあ、なんていう前進かしら。これが革命における人間の意識変革っていうやつね。

革命によって人間の意識が変革されなければ、革命の意味はない。慶子はやっとそのことに気づき、自分の額や目尻のしわに感謝した。きっとおじさんたちが、ハゲを隠さないのもこうした、表面を飾り立てる虚栄心にうちかってきた、誇りたかいハゲであることを知っているせいなのね。そう思うと、つるピカ頭のおじさんや、おなかが樽になったおじさんがとても立派にみえてきてしまった。たぶんこれは今のギャルにはわかりっこないセンスである。よく電車とかで「ハゲとデブだけはごめんだわ」と言っている女の子をみかける。彼女たちは人間の最も大切なのは何な

のかを知らないらしい。彼女の立派なボーイフレンドだっていつかは、ハゲておなかが出るのかもしれない。しかし自分たちとは無縁だと思っているからそんなきついことが言えるのよ。でも私はしわによって気づいたの。人間の本当の価値っていうものを。しわとハゲはいいコンビなのかもしれない。ちょっとたわごとが多過ぎるって。そうね。ごめんなさい。なんでもいいけど、革命にむけて計画を実行していかなくては。そうだ、ナンパをする役は私でなくて以前でてきたスモーキング麗子に頼んでみよう。彼女なら私と違って色っぽいし。

さて一方O氏とM氏、T氏、A氏、H氏は国会のほうにむかっていった。かつて赤軍派が前段階武装蜂起論を提出した。武装して国会に突入すれば人民がこれに呼応して決起をし、革命にいたるというなんともユニークなしろものである。しかしながら大衆はそんなに甘くなかった。無残にも逮捕者をだして終わったのであった。そして今。あの時代のスターたちがここに存在しているのである。あのパステルカラーのつなぎ。糞尿弾はこっそり車に隠してある。いざという時のために使わせてもらおう。

おっ来たぞ、来たぞ。「おどるポンポコリン」のメロディでピーヒャラ　ピーヒャラ　パッパパラパと流れてきた。A氏が太鼓をたたいてリズムをとる。T氏が笛でメロディーを奏でる。なかなか聞かせるではないか。日本人には太鼓や笛がある。琴や三味線はひくのが難しいし、「おどるポンポコリン」にはあわない。なんという素晴らしいセンスだろうと思ったが近づくとそのダミ声に圧倒された。さすがアジテーションなれしたせいか声は大きい。しかし、いまどき、この音痴というのも珍しい。なにせ日本にカラオケが普及してから、歌う機会が多くなったせいか、大衆の歌声はプロに並ぶものも結構いる。昔は違った。プロのアイドルが大衆なみの音痴で、浅田美代子が「あの～子はどこ～の子、こんな夕暮れ～」とはずして歌えば歌うほど、「まあかわいい、まるで素人みたいね。」とうけてきたものだった。そう、あの程度なら私でも歌えるわ、という大衆の心理をうまく活用し、ドロップアウターでも成功できるアメリカンドリームのスタイルをつくりあげ、少年少女の夢をかなえてきたのであった。音痴が切り開いた夢なのである。

しかし、今は時代が違う。たぶん左翼のおじさんたちはカラオケブームに出遅れて、「なんで歌を歌うのにあんな狭い部屋でお金をださなあかんのか。歌は健康的に広場で誰かがギターを弾き、自らの力で作り出す文化でっせ。機械の伴奏に頼って人間の創造力を養えまっか。」と言い訳していたに違いない。とりわけA氏とO氏とM氏については年代ものといえるほど流行と無縁でありながら、新しいものが好きな憎めない人たちである。その耳をつんざく声は多くの大衆になつかしさを感じさせるに違いない。

さあ、みんな、国会を「おどるポンポコリン」のテーマで包囲しよう。「なんでもかんでんもみんな　革命たたかっているよ　トイレの中からポワッと　インチキおじさん登場いつだって　忘れない　レーニンは偉い人　そんなの常識　タッタタラリラ」いい子は手拍子つけて歌おうぜ！調子にのって歌っているといつのまにか見せ物になっていて、「レーニン」を「ゲーニン」と聞き違えて、何かの宣伝にタレントがちんどん屋をやっているのかなっとついてきたようだった。この人気は久しぶりであった。今までこんなことがあっただろうか？

あの安保闘争以来、人気が低迷し、誰も耳を傾けないアジテーションを街頭でやり続けたむなしい日々。人が無視するせいか、アジテーションの内容を進化させる必要さえなかった。そのせいか、アジテーションをするといつも２０年前のままである。しかし、今日は違う。ちびまるこちゃんの歌に変えただけでこれほどの人気者になってしまったのだ。どうだい、私たちの人生もやっと花をむかえそうではないか。などと思っていると国会から一部の議員たちがこっちにむかってきた。初め、誰が歌っているのかわからなかった自民党の人たちはこの人気に目をつけて、選挙で低迷しているのを防ごうと、お金をいくら出したら、選挙の応援を引き受けてくれるのかを交渉してきた。「一日３時間で一人２万でどうですか？」ときいてきた。このかた、アジテーションで騒音罪にとわれ、逮捕されたことはあっても３時間で一人２万とはどういうことか。３時間３千円でもとびつく程のお金である。驚いてポカンとしていると、「この値段では安いですか？いくらならいいですか？」と聞き返したのにはビックリクリクリクリックリだ。このお金で安いなぞというヤカラと自民党の人たちはずっとつきあってきたのに違いない。私たち左翼には無縁な世界であった。「２万円と革命とどっちを選ぶのか、さすがに心が揺らぐところが人間だ。　などと、ホクホク顔で喜んでいると日本共産党がやってきた。配られたビラと歌詞カードをみて、左翼とわかったのか、「おっ、ニセ左翼暴力集団がこんなところにいる。おい、トロツキストはでていきなさい。国会という国民の正当な代表が国策を論じる神聖な場を汚されては困るよ、あっちへいっていって。」とあしらってきた。

「みなさん、今の発言が日本共産党の発言です。彼らはこのようなエリート主義をふりかざして、国家権力と一体となてこびてきたのです。・・・・」と演説を始めたら、大衆が一人去り、二人去っていった。そう大衆はおどるポンポコリンにひかれただけであってけっして思想に共鳴したわけではなかったのだった。よし、もういっちょう歌おう。今度はうけるために振りつけもいれて、さあピーヒャラ　ピーヒャラ　パッパパラパ・・・

するとまた共産党がいちゃもんをつけている。どういうわけか自民党には何も言

わないのに私たちは目の上のたんこぶらしい。「かつては暴力で大衆をまどわし、とうとう気でも変になったのか。おやじはおとなしく背広を着てるのが普通なんだ。労働者の服は背広なんだ。そうでないヤツは怠け者か落ちこぼれと相場が決まっているんだ。」と高飛車にでてきた。共産党の中でも議員をしている人は東大出身者でしめられている。たぶんこの人もそうで、いつも人を上から見下ろしてきたに違いない。「だいたいパステルカラーのつなぎは、若い女の子が着てこそまだかわいげがあるというもんだ。変な格好をしたおやじ見てても目の毒にしかならないんだよ。いった、いった、しっ、しっ。」

気にもとめずに歌を歌っていると、どうやらあの議員は警察に騒音罪で訴えてやるといって交番のほうにむかっていったようであった。むかついたO氏は車から糞尿弾を取り出し、その議員めがけてぶっつけてしまった。プライドの高い議員はその姿で交番にいく勇気はなかったようだ。おびえきってトイレに向かって走っていった。ちょっとやりすぎたようね。でも臭い思いをして、人間の心が洗われるのら、とてもいいことよ。どんなに東大を出て、国会議員に選ばれてもウンコをひっかけられればおんなじように臭いのよ。そのくさい自分に幻滅しながら、人はウンコのクサさにおいては平等であることを学んでいくのよ。ちょっと遠回りだけど、そうやって成長していく動物じゃないかしら。私だって顔にほこりやら虫やらひっさげて悟ったんだし。でも糞尿でなくてよかった。まだ私はそこまで心を成長させられないわ。なんだかどうも話がクサいし、汚いし、品がないわね。そうよどうせ私のレベルはそんなものかもしれないわね。

しかし、そうこうしながら作戦のほうは順調に進んでいった。ひとつは国会を民衆の力で包囲すること。もうひとつは自衛隊をオルグすること。もちろん私の魅力では無理だったけどスモーキング麗子の力をもってしたら大丈夫よ。さあゆこう、さあ歌おう「革命運動アドベンチャー」　つかもうぜ！プロレタリア革命　世界でいっとうスリルな闘い　さがそうぜ！闘う仲間　世界でいっとー　ユカイな奇跡　この世は　でっかい革命拠点　そうさ今こそアドベンチャー　みんなも夢をもって大きな力を信じよう。じゃあ、今回はこれでおしまい。次回に期待してね。

（つづく）

「マルクスとアソシエーション」を読んで

北村　裕

1　はじめに

現在私たちを取り巻く状況は、極めて厳しいものがあると言ってよい。５５年体制が崩壊し、既成の政党や労働組合に足掛かりを見つけることが出来ず、一方政府・支配者階級は、「労基法改悪」「周辺事態法」「盗聴法」「国民総背番号制」等の様々な攻勢を私たちにかけているわけである。古い言葉だが、「主体の危機」と言うことができるだろう。　しかし、悲観してばかりはいられない。私たちの周りには、現在数多くの市民運動や農民運動が沸き起こっていることも事実である。今一度、私たちの足下を打ち固める時が現在の課題のように思われる。

今回、研究会のテキストに選んだ田畑稔著「マルクスとアソシエーション－マルクス再読の試み」（新泉社、1994年）は、このような私たちの問題意識とも関わりあう絶好の題材であると言える。

「はじめに」において述べられている様に、「本書は、あくまでマルクスについての思想史的研究であって、直接、今日我々にとっての実践的方策を扱うものではない。しかし、マルクス論としてはかなり根本的な《マルクス像の変革》を企てるものであり、またそのことによって、《アソシエーション論的展開》とでも表現すべき、われわれの再出発の方向付けのために、いくつかの基本的な足場を提示しようと試みるものである」（同書、p.4）というのが、田畑氏の問題意識である。

私たちには、田畑氏の提起する問題をどの様に実践的に読み解いていくのかということが問われている。

2　田畑氏の「アソシエーション論」

アソシエーションとは、田畑氏によれば「諸個人が、自由意志にもとづいて共同の目的を実現するために、力や財を結合するかたちで『社会』をつくる行為を意味し、またその様にしてつくられた『社会』」（p.4）を意味していると言う。すなわち、マルクスのアソシエーション型社会とは、「自由な諸個人が共同意志にもとづいて活動や物件を結合することによって形成する社会である。」（p.39）。マルクスのアソシエーション論の中では、「《自由な個人性》の全面展開というモチー

フが、・・・大きな柱となっている」（p.165）。そのプロセスは、「『資本』によって外的に『束ね』られた労働者たちが、危機と闘争の中で知的モラル的政治的成長をとげて、『コンバインドな労働』を『アソシエイテイッドな労働』へと主体的に転換し（p.189）、「社会化された人間、アソシエイテイッドな生産者たちが、自然と彼らの質料代謝を合理的に規制し、彼らの共同社会的コントロールの下において、もはや盲目的威力としてのそれによって支配されることを止める」（p.201）というものである。この様に、「『個人性』生成視点を、『共同所有』や『共同のコントロール』をはじめとする『共同社会性』に結び付ける《形態》が、『諸個人の連合化』ないし、『アソシエーション』なのである（p.73）。この様に田畑氏は、「『個人』概念を基軸にしてみたマルクスの世界史像の骨格（p.206）を描いてみせた。　そして、この「『自由な個人性』の全面展開というテーマを」・・・交換論、所有論、労働論、人格論によって、「《理論的》に提示」している」（p.165）。マルクスは、必然の国を土台に、その彼方に自由の国を展望し、そこでは「自己目的と認められた、人間の力の展開」（「資本論」）として、自由を了解している。そして、「共産制社会」を「初期の局面」と「より高度の局面」に区分し、「共産制社会のより高度の局面で、つまり分業の下への諸個人の奴隷的下属が消失し、したがってまた精神的労働と肉体的労働との対立が消失したのちに、労働が生活のためのたんなる手段であるだけでなく、それ自身が第一の生活欲求となったのちに、諸個人の全面的な展開とともに彼らの生産諸力も成長し、協同組合的富のすべての源泉が満々と湧き出る様になったのちに、そのときはじめて、せまい市民的法の地平が完全に乗り越えられ、社会はその旗に書くだろう。各人はその諸能力に応じて、各人はその諸欲求に応じて！と」（「ゴーダ綱領批判」1875年）書いている。更に、「『共産制社会』は、《つねに》『初期局面』から『より高度の局面』への移行過程ないし成熟過程にあると考えられねばならない。労働交換原理は実在性（歴史的生成条件による制約）を、自己目的原理は理念性（目標）を、それぞれ体現しつつ、同時併存していると考えるべきであろう」（p.169）」、「『共産制社会』の成熟に比例して徐々に労働交換原理から自己目的原理へ、社会の規範原理が比重移行すると考えられていたのである（p.169）と、田畑氏は付け加えている。

次に、自由な個人性の全面展開を理論的に提示するとされたなかから「交換論」と「人格論」を見ておこう。

「共産制社会」の「初期局面」では、自由な交換がその原理とされる。交換といっても、商品交換や私的交換ではなく、「生産手段の共同の領有とコントロールの基礎の上にアソシエートしあっている諸個人の自由な交換」（p.171）であり、そこで交換されるのは、商品の交換ではなく労働の交換である。「今や個人的諸労働

は・・・直接総労働の構成部分として実存し・・・したがって個々の生産者は彼が社会に与えるものを-諸控除の後-精確に取り戻す。・・・彼がひとつの形態で社会に与えた労働と同じ量の労働を、彼は他の形態で取り戻す」（「ゴータ綱領批判」）。

また、このような「自由な労働」は、「自由な個人性の確立」をもたらすことになると田畑氏は言っている。「アソシエイテイッドな労働をとおして相互に労働を交換しあう存在として相互に承認しあう。」「諸個人は『交互性』を担う主体として、『向自存在』『自己追求』『目的としての個人』の契機を不可欠に持っている。これが少なくとも『必然の国』における『個別化』原理としての、決定的な意味を担う。」「その意味で個人的利益は『交互性』のあらゆる侵害、交換的正義からのあらゆる逸脱に対して、常に正当に主張されねばならない。」「労働という本来の主体的な姿で、交換の根底としての『普遍者』が確立されている。・・・この交換の根底にある（「物件化を免れた）『普遍者』としての労働が「自由な個人性」を理論的に支えている・・・」「この労働の交換は『平等と自由の生産的で実在的な土台』であって、『平等と自由は、純粋な理念としては、この交換のたんに理念的表現であり、』・・・この労働交換モデルでは『法（権利』や『正義』の規範性が依然大きな社会的意味を持ち続けるのである」（p.177～178）。

もうひとつの、「人格論」については、将来社会の「自由な個人性」が、「近代の生み出した諸個人の『ユニバーサルな』諸関係、『全面的な』諸欲求や諸力能という地盤の上で、『人間が常に生産の目的として現象する』古代人の『崇高さ』を回復させるものとして、『自由な個人性』が構想されている」（p.200～201）。

「『必然の国』とは、諸個人の対自然対他者関係の総体としての生活世界が『物質的生産の領域』として・・・経済学的技術学的タームで総括されたものであり、『自由の国』とは『人間の力の展開』の場として、・・・人格論的タームで総括されたものである。」（p.202）。「自由の国」では、「諸個人は、諸力を総体的ないし全面的に展開、実現しつつ、既成性を不断に超出していくという、生成の絶対的運動状態にあるのであって、しかもこの力の展開はそれ自身が目的なのである」（p.203～204）。「マルクスにとって『実在的自由』とは抽象的には、諸個人が『自己実現、主体の対象化』をとおして自己享受（自己確証）する、というあり方をしていることである。・・・《なにをおこなうか》によってではなく、その行為をとおして諸個人が《どういう価値を実現しているか》によって、『自由の国』が『必然の国』から分かれるのである」（p.205）。

3　アソシエーション論について

最後に、田畑氏の「アソシエーション論」について、いくつかコメントをしたいと思う。　本書が、「はじめに」において、実践的方策を扱うものではないとただし書きが入れられているが、「再出発の方向付けのための足場を提示しようと試み」られた「マルクス再読の試み」（副題）としていることから、著者はそれなりの実践性を持たせようとしていると思われる。それによって、本書はそれなりの水準を持つことができている。

「アソシエーション過程としての未来社会の前進は、脱アソシエーション化の諸力を直視した上で、・・・再アソシエーション化していくプロセス」（p.106）と指摘しているところからみると、現に存在するアソシエーション諸過程に注目しているわけである。その視点において、マルクスの「協同組合」を復権し、現在の協同組合や労働組合、コミュニテイー・ユニオン、「セルフ・ヘルプ・グループ」等の諸形態を評価する地点に立とうとしているわけである。

しかし、現在の資本主義社会の下でのアソシエーション形態から、未来社会へ向けた前進のプロセスが本書には欠けていると思われる。それは、市民社会の総括として現れている国家、ないし国家権力に対する過小評価に基づいている。

次に、田畑氏がアソシエーション形態として位置ずけている「セルフ・ヘルプ・グループ」を検討してみよう（「日常生活世界とアソシエーション」季報唯物論研究 VOL.17　1997/7）。

セルフ・ヘルプ・グループというのは、「同じような障害や苦痛を抱いている個人が、自分の問題を自分自身で解決するための相互扶助を目的として自主的に結成し、しかも専門職から独立して活動している集団」（加藤正明編「新版精神医学辞典」1993年）と定義される。田畑氏は、セルフ・ヘルプ・グループのうち共依存症を取り上げているが、共依存症というのは、アルコール依存症者の配偶者の様に、無意識にその人の飲酒行動を支えている人のことを指し、「生きる上での安心感を維持するために、自分の求めているものを明確にしてくれる相手を一人ないし複数必要としている人間」（アンソニー・ギデンス「親密性の変容」而立書房1995年）のことである。

「基本的障害やその原因が人間関係にある以上、治療的実践そのものが社会的実践でなければならない。治療的実践は単に医者の治療行為に限定されず、むしろ本質的には患者たち自身の治療グループやセルフ・ヘルプ・グループの活動が中心的位置を占めることになる」（田畑稔「日常生活世界とアソシエーション」p.127）

として、「かっては家族や地縁集団がになっていた機能は、いまや『問題縁』で繋がれた集団の中に維持されているのである」（同、p.127）。これを、「問題縁で繋がれた集団、つまり危機と苦悩を共同所有する当事者達のアソシエーションなのである」（同、p.127）と位置付け、これを「日常生活世界の危機から、『アソシエイテイブに生きる』ことの意味が日々再生産されている一例」（同、p.128）としている。

今日このようなセルフ・ヘルプ・グループは、グループメンバーの考え方や行動を変えていく自己変容機能や、グループ外の社会的環境に働きかける社会変革的機能を持つことは、識者によって指摘されている。

このようにみてみるとセルフ・ヘルプ・グループは、心の傷が疾患の原因にもなっているが、同時に絆の再結合の結節点にもなっていると考える事が出来る。しかし、いろいろあるセルフ・ヘルプ・グループの中で、田畑氏が共依存を取り上げた理由は明確にされていないが、彼らがここから一気に普遍的な「共同世界」に飛躍することは不可能と思われる。

このことと同じ様に、田畑氏の「自由な諸個人の連合」として考えられている「アソシエーション」において、個人は、交換、所有、労働、人格の面から規定はされているが、具体的にイメージしにくく、未だ抽象的なものとなっている。

「商品の物神性は資本主義社会において起きるが、資本主義社会において人間どうしの関係が『物神化』されているわけでは決してない。そこにあるのは、それぞれが自分の利益を追求している『自由な』人間どうしの関係である。・・・『人間どうしの関係』に物神性のある社会-資本主義以前の社会-では、市場のための生産ではなく『自然な』生産が支配しているので、商品の物神性はまだ発達していない。この人間どうしの関係における物神性は、その本来の名前で呼ぶべきである。それは、マルクスが指摘した様に『支配と隷属の関係』である。」（スラヴォイ・ジジェク「イデオロギーの崇高な対象」1989年）。

アメリカの自我心理学派は、「自己」という纏まりを想定しているが、それはあくまで仮象で、主体は思考と感情の統一された集合ではなく、「中心から外され」（脱中心化）根本的な分裂を刻印されている。Lacan.J.の鏡像段階論はこのことを明かにしている。

「６か月のある時期に、子供は鏡の中の自分の像を見る事を通して、自分の身体の纏まり、全体の形態、『ゲシュタルト』に気付く様になる」。そこでは「子供はただ自分の姿を外部の像において、すなわち実際には触れる事の出来ない虚の、疎外された、理想的な纏まりの中に多少とも全体的で統一されたものとして見ているにすぎない」。このような「鏡像段階は『空間的同一化』の始まりであり、鏡に映

しだされた世界像とのその後の葛藤の始まりである。未分化で寸断された主体の存在様式と、主体が自我として自らを同一化している自律的な像との割れ目に基づくこの葛藤は、他者に主体が同一化する時にも継続する」（ビチェ・ベンヴェヌート他「ラカンの仕事」青土社1994年）。このように自我は、別の人間の中に映し出されることによってのみ、その自己同一性に到達できるわけである。

田畑氏の想定する個人の規定は、このような精神分析の知見を組み込まず、抽象性を免れていない。

(1998/5/24)

『マルクスとアソシエーション』（９４年新泉社刊　田畑　稔著）を読む――今村仁司『現代思想の源流』所収『マルクス――神話的幻想を超えて』（９６年講談社刊　『現代思想の冒険者たち』００）を念頭に置きながら――

１９９８．５．１９．

畑中文治

今回のこの研究会での検討テーマは、田畑稔さんの『マルクスとアソシエーション』になった。ところが奇しくも、やはり私の参加している別の研究会（ＭＲ研究会）でもほぼ同じ内容で、しかもあい前後して田畑さんをお招きして、公開フォーラムを行うことになった。もともと２つの研究会は活動もメンバーも一部ではあるが重なり合う部分もあり、テーマが重複したことも必ずしも不思議ではないのだが、これを奇貨として怠慢な私は両方に共通するレジュメを作成して、多少ならず楽をさせていただいた。こうした事情で以下の報告は、ＭＲ研究会でのレジュメに少し手を加えたものであることをあらかじめお断りしておく。

１）ＭＲ研究会での９７年度研究テーマに至る討論の経過

・これまでの年間研究テーマ：　９５年度「運動のなかの社会主義」、９６年度「現代資本主義」
・９７年度研究テーマ「社会変革の構想」
＃１：『現代社会の理論』（見田宗介）をめぐって
＃２：アナルコ・キャピタリズム／リバータリアニズム
＃３：『労働のメタモルフォーズ』
＃４：『労働のメタモルフォーズ』／小倉利丸
＃５：『マルクスとアソシエーション』
・マルクス派共産主義（今村論文書評）
　共同体論における主体の不在。
・フォーラム９０ｓ今村報告。
　近代を超える理念と言説に関するネガティブな印象。
・「マルクスとアソシエーション」レジュメ討論。

2）アソシエーション論についての今村さんの提起

・循環論的という評価。
自由な諸個人のアソシエーション→社会的生産過程の意識的コントロール→幻想から解放された諸個人→
・形式論的という評価
革命の担い手としてのプロレタリアートの消極的規定。
・アソシエーションについての５つの問い
①個人がアソシエートするとは
②アソシエーションの自由平等の原理とは
③アソシエーションの公平の原理とは
④自由な諸個人の精神とは
⑤アソシエーションを語る言説とは

3）マルクスとアソシエーションの提起

[第３章] アソシエーションと移行諸形態
「アソシエーション過程」の意味するもの
協同組合
コミューン
[第４章] アソシエーションと『自由な個人性』
交換―所有―労働―人格
α（前資本制）―β（資本制）―γ（アソシエーション）
いわゆるネガ→ポジ史観

4）哲学あるいは科学としての唯物論について（理論的背景）

①唯物論
今村：イデオロギー批判、指さし機能。偶然性と偏り。衝突と闘争。
②資本論の科学と弁証法
ＭＲＲ９号古賀論文。下向／上向法の理解。「経済学を批判することを通じて、民衆の先入見内部のプロレタリア的側面を明確に『分離』させつつ、この『分離』

した側面をもって、「民衆の先入見」を変化させていこうということ」。

5）主な論点

①社会批判の実践的諸契機。生活協同組合、労働組合等。主体と実践１。
②アソシエーションにかかわる歴史的経験。グラムシなどの評議会運動。評議会共産主義。ユーゴの自主管理社会主義など。主体と実践２。
③マルクス再読、アソシエーション論の検討のきっかけとなった７０年代末の出発点とは何か。
④自由な諸個人についてどのように語ることができるのか。

6）公開フォーラムを終えて

田畑さんの報告を直に聞いて、私は重要な論点について十分理解していなかったことに気がついた。それまでは、田畑さんの議論をほぼ平田清明のそれにアナロジーして理解していたのだが、これは大変失礼な誤解であった。端的には『序論』に登場する「『社会的編成』の４つの型」についての理解である。『マルクスとアソシエーション』の読者にとっては不必要だが、煩を厭わず、田畑さんの社会類型の定式を示せば以下のとおりである。　Ⅰ　自生的共同体型
Ⅱ　商品交換社会型
Ⅲ　権力社会型
Ⅳ　アソシエーション型
このうち第Ⅱ類型と第Ⅲ類型がその他と並列しておかれていることに違和感が残ったのだが、読み飛ばしてしまった。これらのタームが具体的にはどのように使用されているかを、以下引用で示す。
「さて、現実の社会ではこれらの基本型が複雑に編成され交錯している。たとえば資本制が発達した近代市民社会の場合で見れば、第２基本型の『交換社会』をベースに、資本による生きた労働に対する支配が組織されている（第３基本型）。同時に資本所有者は株式会社という『直接アソシエイティッドな諸個人の資本』として、また労働者は労働組合などとして、第４基本型で組織されている。非労働領域では同好同信などのアソシエーションが無際限に『泡立って』いる。第１基本型もまた、きわめて収縮した形態ではあるが、核家族として、また周辺／辺境地域のコミュニティーとして再生産されているのである。」　「…マルクスの人類史了解を

図式化すると、①自生的共同体とその諸変容→②『市民社会』→③『アソシエーション』、という成層的展開が見えてくる。」

わたしはこのうちの、後ろのワンフレーズだけを見て、平田清明などのネガポジ史観と同じであると誤解していた。念のため付け加えればここで言うネガポジ史観とは以下のようなものである。（残念ながらここまでで時間がなくなってしまった。以下については機会を改めて検討することとしたい。）

田畑稔「アソシエーション論」について
マルクス再読の試みに学ぶ

津村　洋（『国際主義』編集会議）

【この簡単なまとめ・メモは、９７年１１月および９８年１月の研究会に提出したものに若干手を入れたものです。】

以下、引用した部分は、検討文献である田畑稔『マルクスのアソシエーション　マルクス再読の試み』新泉社1994からのページを示してあります。

１、著作の意図、問題意識について

著者は、これまでの歴史的な社会主義・共産主義運動にたいして、とりわけ以下の点で批判的に対決しようとしています。

「マルクス死後、社会主義・共産主義の運動の主要方向が、歴史的諸条件に制約されて、実践面でも理論面でも国家集権的性格を持ち続けた」pp. 22
「ソ連では・・・非アソシエーション型、国家集権型システムが実現していたことは明らか」p. 152

さらに理論面で一般的に以下のように反省的に語り、マルクス理論の再検討、再構成を呼びかけています。

「われわれがこれまで『マルクスの稜線』と見ていたものが、じつはエンゲルスやレーニンやスターリンの稜線であったことに、われわれはまだ気づき方が足りない。・・・われわれ自身の『マルクス主義』という『雲』が『マルクスの稜線』を見えなくしている」pp. 250

以上から、この本の意図は端的に以下のように要約されています。

「かなり根本的な《マルクス像の変革》を企てるもの」p. 4
「《アソシエーション論的転回》とでも表現すべき、われわれの再出発の方向づけのために、いくつかの基本的な足場を提示しようと試みるもの」p. 4
「『社会主義』ないし『共産主義』という旗印で、１９世紀以来今日までつづいているグローバルな運動の、到達点と限界を、『アソシエーション』論を基軸にすえて、自分なりに総括」pp. 4-5
「《アソシエーション論的転回》を遂行する方向で、その現在的可能性と再生の条件を探求してみよう」p. 5

現在われわれに求められているマルクスやレーニンなどの理論的再構成の課題にとって、著者の問題意識は注目に値するものがあるでしょう。
ソ連などの国家集権型システムにアソシエイションを対置する意図・趣旨も理解できます。
少なくともアソシエーション論を基軸とする批判作業は、従来のスターリン派式の理解の弱点をえぐりだすものと評価できます。

２、「『批判』というスタイル」について

著者は、「補論　マルクス再読の試み」の「３　『批判』というスタイル」において、なかなかいいことを述べていると思います。pp. 222-224
「プロレタリア革命は不断に自分自身を批判し・・・すでに成し遂げられたと＜思える＞ものに立ち戻っては新たにやり直さねばならない。」というマルクスの引用もされています。
内在面、概念把握面、揚棄面の三契機において、「教義的スタイル」に＜批判というスタイル＞を対置したマルクスの姿勢から学ぶものが多くあると思います。
しかし、その点からすると、著者の批判スタイルには疑問が残ります。

本書では、マルクスの稜線　→　「マルクス主義」という雲　→　マルクスの再獲得というシェーマが貫かれています。
いわば１００年以上にわたる「マルクス主義」という雲の時期はもっぱら否定的に捉えられており、ここでは＜批判というスタイル＞が貫かれているように思えないのです。昔学校の教科書で習った「暗黒の中世」みたいな雰囲気みたいです。

マルクス以降の実践と理論と＜批判というスタイル＞で格闘することなしに、著者の理論は突然の＜転回＞という遊離した位置になってしまいます。

エンゲルスやレーニンはもちろん、毛沢東やスターリン派にさえ、限界や弱点ばかりではなく、内在的に批判的に摂取し、学ぶべきものがあるはずでしょう。マルクスの＜批判というスタイル＞は、勧善懲悪式の二項対立を越えたところにあるはずです。マルクスからはもっぱら肯定面を、その他からはもっぱら否定面を取り出すような批判の機械的なふりわけでは、歴史的な階級闘争の評価と遊離してしまうことになると思います。
著者も「マルクス風にいえば『われわれの眼前で演じられている階級闘争の隠れた意味をもっとも上手に解読する』」p. 218 と引用しているので、矛盾を感じてしまいます。

３、唯物論的歴史観について

著者は、「序章　アソシエーションというマルクス再読視座」の「４　『社会的編成』の四つの型」において、①第一基本型「自生的共同体」②第二基本型「商品交換社会」③第三基本型「権力社会」④第四基本型「アソシエーション」と分類しています。pp. 35-41
この四っつの基本型のうち、第二、第三基本型は一体に取り扱うのが自然ではないでしょうか？　なぜなら、第一、第四基本型には非権力社会が対応し、第二基本型には権力社会が対応していると思えるからです。商品交換が成立・普及する社会には、ある種の強制力・権力が前提されます。

それはさておき、著者は歴史的流れとしては以下のように三区分しています。

「・・・マルクスの人類史了解を図式化すると、①自生的共同体とその諸変容→②『市民社会』→③『アソシエーション』、という成層的展開」p. 41

この歴史的見方には基本的に賛成です。

スターリン派の「唯物論的歴史観」は、原始共同体→奴隷制→封建制→資本主義→（社会主義）共産主義という平板な発展段階論の弱点があったように考えています。

また著者の定式化は、同じく三区分の形式をしていますが、人間的本質の獲得→その疎外としての階級社会→本質の再獲得という、いわゆる疎外論的歴史観とは違います。

自生的共同体とその諸変容（ローマ的、ゲルマン的　奴隷制、封建制）→資本主義（市民社会）→共産主義（アソシエーション）という歴史発展の構想の中に、解体されていない共同性に着目したマルクスやマリアテギの階級闘争観が基礎づけられているのだと思われます。

４、階級形成について

旧来のスターリン派の階級形成観は、近代資本主義－工場制度によるコンバインドされた労働者→その結束と組織性の発展という回路からもっぱら考えられる傾向にあったように思われます。だから、個人は、ブルジョア個人主義批判における個人として、集団的組織性・一枚岩性に対立する個人として一面的に取り扱われてきたのです。

いわゆる戦後の実存主義思想はこの点に一番反発していたはずです。にもかかわらず、諸個人の個別化・主体を核心とした実存主義思想からマルクス主義への接近・融合が生まれたこともまた注目すべきことだと思っています。

従来のスターリン派の理解にたいして著者はもう一つの面、自生的共同体の解体を通した個人的所有、諸個人の個別化、近代的自我といった面を強調しています。

この批判的視点は賛成できます。

この諸個人の個別化を通して、かつての自生的共同体を越えた次元で新たなアソシエーションを実現しうるからです。

５、エンゲルス批判について

著者は、けして多くを語ってはいませんが、いくつかのページでエンゲルス批判に触れています。中でも１８２ページから３ページにかけてのエンゲルス批判は重要な論点になると思います。

マルクスが資本論において「個人的所有再建」を語っている部分にたいし、エンゲルスがデューリングへの反論として、社会的所有＝生産手段、個人的所有＝生産物、消費対象と解釈している点を誤りとしています。

この点は、共産主義理論の根幹にかかわる所有問題での正しい批判的指摘だと思います。労働の対象的諸条件を主体的にかかわり、人格的自由・自由な個人性の対象的諸条件を所有した独立・自営の自己労働にもとづく生産者＝所有者の歴史的地位を積極的に捉える視点をけしてあいまいにしてはならないからです。

６、過渡期とアソシエーションについて

著者は第１章で、アソシエーションを国家にたいする社会という範疇で考える傾向を批判しています。この見地を第３章「アソシエーションと移行形態」で展開し、国家もまたアソシエーション的に改造し、死滅させていくものとして捉えている著者の視点はすぐれていると思います。

国家に対立する対抗権力的な二元論ではなく、労働者民衆自身が国家を旧来のありかたから根本的に改造していく過程と慣習・法意識・人と人との結びつき方のレベルでの変革を総合しようという観点がすぐれています。

７、【補足】「第１章　ルソーのアソシアシオン論とマルクス」のメモ

この第１章で著者が主張している要点は、概略以下のようなものである。
（著者の見解にたいするコメントは別途）

（１）、マルクス「アソシエーション」論の原点、源流は、意外なことに１９世紀前半のイギリスやフランスの社会主義者ではなく、ルソーにある。

（２）、マルクスは「クロイツナハ・ノート」（１８４３年夏）においてルソー『社会契約論』（１７６２年）からの詳細な抜き書きをおこなっており、

『ヘーゲル国法論批判』（１８４３年夏）『ユダヤ人問題によせて』（１８４３年秋）『ドイチェ・イデオロギー』（１９４５／６年執筆）などにルソー「アソシアシオン」論の影響が明瞭に見られる。

（3）、ルソーは『社会契約論』において、国家あるいは政治体を「アソシアシオン」組織として構成しようとしている。

（4）、以上から、従来のマルクス「アソシエーション」論解釈は、初期社会主義との関連だけを見てアソシエーションを非政治的反国家的性格のものに限定してしまった狭さがあったと言える。

では、以下、第１章の項目にそって簡単にメモ的にまとめてみる。

1）アソシアシオンとしての政治体

マルクスの抜き書きからうかがえるルソー『社会契約論』における「アソシアシオン」とはどういうものであるか？

1）「モラル的集合的団体」を「生産する」諸個人の相互的「行為」
2）共同意志（合意ないし契約）の形成という形式面
3）「一般意志」（共同利益の実現を欲する意志）の「最高指揮」の下への各人の服従、という内容面
4）「自然的自由」から「合意による自由」「市民的自由」へ、という移行面

ルソーが政治体を一種のアソシアシオン組織として構成しようとするとき、そのアソシアシオンの＜組織としての＞基本的特徴を抽出すると、キータームは以下のようになる。

1）共同目的
2）目的実現手段としての力の統一
3）全員一致の最初の合意
4）自己制限
5）合意による自由
6）集合的人格

7）総会
8）執行権の委託
9）委託の停止

以上が、各人が共通目的のために、自由意志にもとづいて力を結合する組織形態としてのアソシエーション組織の基本特徴。

ルソーのアソシアシオンの国家主義的特質は、市民的義務の厳格主義と不可分である。

この理論の社会背景として、封建貴族や封建的諸特権の閉鎖性が問題として意識された国民国家形成期であったこと。

2）『ヘーゲル国法論批判』における「民主制」論

『ヘーゲル国法論批判』におけるマルクスによる「真の民主制」の構想。

「民主制においては体制自身がたんに人民のひとつの規定として、しかも人民の自己規定として現象する」
民主制は、「人民自身の作品として、定立されている」
民主制は、「人間の自由な生産物として、現象する」
「民主制は、総ての国家体制の本質、つまり社会化された人間なのであって、ただそれ［本質］がひとつの特殊な国家体制としてあるのだ」

以上から、ルソーは国家もまた「アソシアシオンの一形態」として構成し、マルクスはこれを受けて「真の民主制」を構想した。

したがって、アソシエーションを「反国家」的に制限し、政治範疇に対立する社会範疇で理解するのは間違い。

3）『ユダヤ人問題によせて』のルソー論

マルクスは「政治的人間という抽象物をルソーは正しく描写している」と評価している。

そのうえでマルクスは、ルソーが「人民」「市民」が「政治的人間という抽象」にとどまっていることを乗り越えていく。

「現実的個人的人間が、抽象的公民を自分の中へと取り戻し、個人的人間として、その経験的生活において、その個人的労働において、その個人的諸関係において、類的存在者となったときにはじめて、人間が彼の『固有の諸力』を社会的諸力として認識し組織し、したがって社会的力を政治的力としてもはや自分から分離しないときにはじめて、そのときはじめて、人間的解放が成就されているのである」

以上から、マルクスのアソシエーション論は、要素主義的個人主義を前提とするものではなく、ルソーの人間の「固有の諸力」＝「自身だけで完全でかつ孤立せる全体者」から区別される。

4）「アソシアシオン」と「アグレガシオン」

「［幻想的ゲマインシャフトではなく］現実のゲマインシャフトにあっては、諸個人は、彼らのアソシエーションの中で、また彼らのアソシエーションをとおして、同時に彼らの自由を獲得する」
「これまでの連合化はたんに（たとえば『社会契約論』に書かれているような随意的なものでは決してなく、むしろ必然的な）連合化でしかなかった（たとえば北アメリカ国家や南アメリカ諸共和国の形成を参照）。」

これらマルクスの見地は、ルソー『社会契約論』の「力に屈するのは必然の行為であって意志の行為ではない」を受けたもの。ルソー自身が「必然の行為」であるアグレガシオン」と「意志の行為」である「アソシアシオン」という選択肢を提示している。

もちろんマルクスは、「分業」「競争」「資本による労働の実質的包摂」などの「自生的」諸関係によって構造化された「市民社会」を前提としており、この前提のもとでの「連合化」は「必然的連合化」にならざるをえないことを見て取っている。
したがってマルクスはルソーよりラディカルに、「市民社会」の構造そのものを揚棄するものとしてアソシエーションを構想している。[May 30, 1998]

個人主義・自由主義とマルクス主義

旭　凡太郎

①　アソシエーションという場合には、自由な個人の連合、なり自立した個人の連合といった意味において社会主義を考える、運動を考えるといったことと考える。
そこでは、スターリン体制の意味した強権体制が、プロレタリアートの統治能力の未成熟の結果と考えることを出発点としている。という意味では論議自体は不可避のものと考えられる。
それはさらに、自由あるいは自立した個人の連合であるとともに、非国家的・非イデオロギー的連合、運動の発展として社会主義を考えてゆこうとしているものとも言える。
ここでの「自由な」ということと「自立した」ということの間で意味はやや異なると思われる。それは「個人」と「社会関係」ということの関連の問題として考えてゆきたい。
他方「非国家的」「非イデオロギー的」という問題についても微妙なものがある。
それはたとえば田畑氏が、ルソーの社会契約と一般意志（「身体とすべての力を共同のものとして一般意志の最高の指導の下におく。そしてわれわれは各構成員全体の不可分の一部としてひとまとめに受け取る（「社会契約論」Ｐ３１）」）に対して好意的に評価しているところにあらわれている。
この「一般意志」は諸個人の自由意志の相互契約のみを認めるプルードンによる批判の対象となったものである。自由主義、功利主義にあっても、所有と身体への侵害からの自由を守るためにのみ政府権力を必要悪として承認するのであって、普遍的意味での一般意志は位置づけられていないと考えられる。（といってもそれらはブルジョワ民主主義における力点の相違でしかないのだが）
他方、それはヘーゲルからは「意志を国家の原理としてたてた功績」は認められながら、「個別的意志から出てくる共同的なものにすぎない契約」と退けられ、「国家＝客観的精神」が対置されたのであった。
そしてマルクスはこのヘーゲルの神秘主義や主権の不在（というより君主制）を批判しつつも、国家＝（ブルジョワ）生産様式の総括なり、支配階級の特殊利害の一般化なり、幻想の共同性なりなりとして客観的なものと見るという点では、ヘーゲル批判のなかから国家を導いている面があるわけである。といっても「支配階級の一般的意志」なるものが客観的にあるわけではなく、具体的生産様式の運動、階

級闘争をとうして相闘い、論議されてゆくなかから析出されてゆくのであるが。（マルクスの「市民社会と国家の分離批判」という見方、すなわち「財産や労働を社会的な要素にまで高めないで、かえってそれらを国家全体から完全に分離し・・（全集１　Ｐ４０４）」という見方は、それと表裏一体のものである）

(自立した個人と社会批判)

②　そしてアソシエーションといった場合には、自立なり自由な個人による連合といったことを、社会批判、イデオロギー、一般意志にに先行したいという意図と、運動なり組織化なりの源泉をどこに見出すのか（自然発生性なり目的意識性なり）、ということの間を揺れ動いていると考えることができる。

例えば「革命時の情熱・献身・連帯」という人間的資質への過度の依存の悲劇をさけての日常的実践への強調と、ミルの従業員持株制ー利潤分配制や協同組合を掲げる（唯物論研究６１）ことをアソシエーションとするとき、その意図は明瞭である。

そこでは競争的市場経済の中での利潤追及と、職能・生産から統治への能力の蓄積とをとを統一しようということである。

しかし身近に考えた場合、倒産企業での自主生産や、争議団の多かれ少なかれの生産協同組合化や、高齢者協同組合や、中小企業労働運動での仕事の開拓する場合や、障碍者運動等での小規模作業所や、さらには消費者協同組合ならびに付属工場等々の例は数多い。それらは労働運動や地域と結び付いているし、又運営や給料の配分等をとうしても社会意識と不可分なものであると考えられる。もし利潤分配制なり従業員持株制等が、なんらかの実体的意義あるものとして存在するとしてもそのような形をとるだろう。

③　たとえば田畑氏は協同組合について論じながら「たとえ所与の条件に制約されて、その内部に権力関係、指揮機能の分業的固定化、ヒエラルキー的編成などを再生産せざるをえない場合でも・・・アソシエートしあった諸個人全体に（企業でいえば従業員全体に）無条件に『主権』が存在する。・・・けれどもアソシエーションは同時にそれ以上でなければならない。なぜならそれは少なくとも原理上、権力関係や指揮機能の分業的固定化やヒエラルキー的編成そのものを克服するだけのポテンシャルを備えたものでなければならない（Ｐ１５４）」と、正しい問題設定なが ら飛躍した指摘を行っている。

多国籍企業化し法人化した現代資本主義の下で、生産協同組合なりが増殖しその連合が資本主義にとってかわる、ということはほぼ有り得ず、あるとしてもさまざまな労働運動、農民運動、反差別運動、反帝闘争の一環として、またはそれと結び付いて「従業員主権」以上のポテンシャルが有り得ると考えるべきだろう。（ヨーロッパの生産協同組合も消費協同組合、労働組合、政党とむすびついている）

マルクスの協同組合への評価を問題とするときの、「市場メカニズムを前提にして・・労働者の協同組合を評価する」ことと、「生産と交換の新たな総社会的調整システムをつくりあげる（Ｐ１１８）」ことの落差への言及においても同じ問題がある。つまり私的交換を前提にしてのそのような交換システムの拒否（マルクス）ということとの落差の間を、田畑氏も揺れ動いているものと思われる。

そして「マルクスは総社会的調整原理として『あらかじめの合意』を市場原理に対置した」と結論しているわけである。それはアソシエイテッドな知性と位置づけられている。すなわち「（分業、交換、競争等の）自立した社会的諸力をアソシエイテッドな諸個人に服属させる」「各人自身が欲求主体（消費主体）としても生産力主体（労働主体）としても合意内容をなしている」ことを展望しているわけである。

こうして「各人が合意内容であるが故に合意主体でもなければならない。没規範的で物件化された市場調整や官僚調整とは異なり、各人自身が・・責任主体として総社会的調整過程に論争的にかかわらねばならない（Ｐ１２８）」というとき、それ自体としてはほぼ全面的に支持されるべき内容なわけである。

しかしそれは「協同組合」なりの「具体的無反省的意識」自身が「内的一貫性に駆り立てられてそれ自身の真理へと移行していく事態」という形で展開されている。

ここでは突如空想的移行の論理によって、諸社会運動や諸社会意識や資本主義批判に代位しているわけである。

(ユーゴ自主管理の経験との対比)

④　ここでの問題は協同組合なり、アソシエーション社会は、Ｉ私的交換または市場を前提としたそれ　IIあらかじめの合意すなわち「社会の総社会的連関へのコントロール」の下にあり、分業・指揮・ヒエラルキーをも止揚するポテンシャルを備えたそれ　III全社会的規模で実践的経験をもつユーゴ自主管理社会主義のそれ、といかなる関係にあるかという問題でもあるわけである。（IIIは協同組合というより、

マルクスがゴータ綱領批判で述べた協同組合社会、すなわち一国一工場との対比での社会の生産単位といえる。それはプロレタリアが権力奪取し生産手段を社会化したのち、ソ連型一国一工場型指令制度が「賃労働類似」であることから、管理運営を各工場自主運営（管理組織の選挙制をふくめて）するという制度であった。すなわち所有は国有ないし全社会的所有であり、管理運営権は各労働集団の下においた制度といえる）

しかし実際問題としてⅠ、Ⅱの間にある巨大な落差はまさに「革命」なのであって、それは単に制度の変革ではなく、プロレタリア人民の巨大な意識の変革と従って統治能力の変動を意味するものと言えるのではないだろうか。

たしかに革命は政治権力の奪取のみではない。プロレタリア人民の自ら統治してゆく経験と能力を培うものであるし、それぬきに革命自体が不可能にちがいない。

協同組合なり自主組織という形で生産や事業運営に経験を積むということは望ましいし、そのような機会は今後数多く生まれてくるにちがいない。

それらはすでに生まれているし、また諸種の運動自体、労働運動、農民運動、反差別運動、反帝闘争全体が協同組合的要素を数多く抱えはじめているわけである。

そのような運動全体が労働者人民のアソシエーションなのである。

だから田畑氏が「国家と個人の間の中間組織としての産業組織の具体的位置づけを欠いている（共産党宣言の『国家への集中』への言及）」という場合、たとえば１９２１年の労働者反対派の「労働組合の産業管理」の主張がまさにそのような主張だったのであり、そのような主張の芽を育てきれなかった（その結果ユーゴや中国文革－民主化やポーランド連帯といった形で流出してきた）当時の社会主義運動の壁といったことをまずもって総括すべきなのではないだろうか。

⑤　それはたとえば協同組合などからその内在性に従って、あるいは「原理上、権力関係や、指揮機能や、分業の固定化やヒエラルキー的編成そのものを克服するポテンシャルを備え（Ｐ１５４）」ているといったこと考え方の問題性とも関係する。それは、憲法で自由・平等をうたっているのだから人を搾取することを克服するポテンシャリティがあるはずだ、といった論議と同レベルではなかろうか。

たとえばユーゴスラビアでは、各工場自主管理システムをとり 選挙制をとったにもかかわらず、世界市場競争にさらされるなかで大企業の経営陣トップが固定され、党よりも独自の力をもったとされる。

そのことに危機感をもった共産党指導部が１９７３～７６年４０００人の実力ある経営者を更迭した（主にセルビア人）（徳永彰作「モザイク国家ユーゴスラビアの悲劇」）。

それは経済改革、経済文化革命の一環として行われた。経済改革としてはこれら固定化してゆく経営陣や工場内組織への対策として、各工場・職場・部門へと組織単位を自主管理組織として細分化する方向へと進んだ－（連合基礎組織）－。

これらが「労使」利益共同体化による労働者福祉への利益配分や解雇不可能化による生産性停滞と連動してインフレーション、分極化等、後の崩壊への前提条件を蓄積したとされる。

これは自主管理が全社会的・全国的な労働者人民による統治・決定との相互関係においてのみ存在しうることを意味している－資本主義ではそれは価格メカニズムにおいて一元的・専制的に行われる－。がそれだけではない。

指揮機能の固定化への克服の見通しが立たない場合、労働者階級は労働組合等による下からの管理への統制や（レーニンがかって「国家と革命」で労働者は専門家を雇うと表現したような）、管理の学校と機能の分離や（企業外での管理、科学、技術等の習得）、諸政治、文化活動の一時代を経なければならないかもしれないということである。

利潤分配制－従業員持株制をいうならば、むしろこのような場合に意義有るかもしれない。

しかしその場合でも　ａ資本制から出たばかしのプロレタリアートの終局的解放＝各人による社会ならびに自己統治にむけて、どのような段階なのかを確認してゆく作業

ｂ既述のごとく各工場・企業の一定の自主性・独立採算制・競争ということと、全国的・全社会的レベルでの討議・決定によるそれへの統制・調整という問題（ａの問題、すなわち死滅しつつある国家や、指揮・管理機能やヒエラルキーや分業の止揚はこのレベルにおいてのみ可能である）

ｃ全国的レベルでの調整の内容としての、たとえば「価格」の全国決定をとうした競争の制限ということと、競争の組織化ということと、競争の範囲の拡充ということを問題とせざるをえない。

そのような意味では等量労働交換制といっても、田畑氏のようにほぼ分配・個人的報酬に限定する前にまずもってこの問題に行き着くわけである。たとえば価格の全国調整・決定如何と労働標準の設定という問題がある。競争はその下での限定された範囲での、品質や必要労働時間をめぐって行われることになる。

しかしこの品質や必要労働時間の差は、（もし一国一工場ではなく独立採算制なら）「収益」に反映するのだが、それはどこに属するのだろうか（全国～各工場）。

そして経験・能力を含む多種労働者・構成員への分配にはいかなる原理があるのだろうか。分配は労働時間、労働強度にとどまりうるだろうか。

たとえば品質、生産方法の優劣は、経営陣、管理者、専門家の有能性、能力によるのだから高い報酬を要求する権利がある、と主張するかもしれない。

これに対して労働者は、君はアイデアを出したかもしれないけれど、作ったのは我々だ、とか複雑労働であることは認めよう、そのための養成費を私的に出費したのならそれに限った高い賃金を認める、と反論するかもしれない。

しかし資本主義企業経営者出身者は、生産性を上げるのは企業家精神、イノベーションであり、これは才能と努力だから高く評価しなくてはならない。社会主義的平等の精神は理解するがそれでは能力ある人はそれを発揮しないかもしれないし、海外へ流出するかもしれない。アメリカは世界から人材をかきあつめ、分配格差拡大をはげみにしてハイテクをリードしているではないか、と反論するかもしれない。

個人的所有とか自由な個人とかの論議はこういった問題への基準としてゆくのでなくては無意味なものとなってゆく。それはｃの競争の範囲の拡充とも関連する。しかしそれらは自由主義への批判との関連で考えなくてはならない。

(自由主義、功利主義の社会主義批判)

⑥　自由主義、功利主義のイデオローグであるＪ・Ｓ・ミルは「（経済的弊害を競争に帰するという）社会主義者たちの競争の現実的作用についての混乱した誤った」見解を次ぎのように批判している。すなわち人類の生来の怠惰癖を指摘し「ある種の有望な新発明を採用させ（る）・・・ということはいやしくも彼らの競争組織が存在することを知り、そのため、自分たちがなそうとしないことを他の人たちがなしはしないか、そしてその結果自分たちは競争に負けはしないかという恐れをいだくのでない限り、容易ではない（Ｊ・Ｓ・ミル「経済学原理（四）」岩波文庫Ｐ１９７）」）。この句は「労働者階級の将来の見通し」の章で、資本家～労働者関係の終えんと協同組合、従業員持株制とセットに論じられている。

ここでは競争のもつ範囲や意味ということが問題となる。といっても労働過程を個別資本の専制のもとにおくか、全社会的課題とするかで次元を異にするのではあるが。後者においては差別や障害を克服してゆく組織・社会関係の創出や、都市と農村の対立を克服する方策や、分業・指揮監督の固定化の止揚－全成員の監督・科学の習得や学習・教育方法－への発明・創意等が競争の範囲として含まれてゆくということである。また物的発明・発見においてもクリーンエネルギーやコンポスト等、そのような方向性の比重が殖えてゆということが想定される。（ただし物的生産力とそれへの発明・発見の価値自体は主要な柱であり続ける。また物的生産の発

見・発明はそのための労働が当該工場収益に幾分か反映することがあっても、全国への還元が急速にはかられてゆくにちがいない。それは現在の「知的所有権」の排他的性格と根本的に異なる）　それらは貨幣化、価格化することがますます困難な、ないし利益・利潤競争化することがふさわしくないような労働関係、社会関係を想起させる。そこでの人々の自立にむけての社会観の形成や価値観の多方向性ということが想起されるわけである。

⑦　こうした開発力、創造力といったこと自体の多方向性ということと、多数の人々が職能ならびに監督責任や科学・技術を習得・経験してゆく（それは人々の権利と義務の内容として展開してゆくのだが）こととが重なって、旧来の管理・指揮機能自体が相対化してゆく可能性ということを考えておかねばならない。

すなわち管理・指揮機能から、指揮官的機能が序々に弱体化し、事務的統計的機能というかたちをとってゆくことが考えられねばならない。

そういったことの中から、レーニンの構想した公務への順番の参加といったこと、従って指揮・監督機能、固定的分業の止揚といったことへの接近が可能となるかもしれない。

註）　従って初期プルードンの考えた「全ての労働者が才能・能力すなわち集合財産である」「彼の才能は共有財産であって彼はそれに一文も払っていない」「才能は・・社会の創造であり、それを受ける者は受託者にすぎない（「所有とは何か」）といった問題設定は、以上のように労働過程や労働力の使用や再生産が社会的行為となることのなかで意味を持ってくるものと考えられる。

⑧　このようにして競争と連帯とがますます同義となってゆくような労働関係、社会関係の創出が目指されるわけである。

そのような意味で私的資本の労働者への専制とむすびついた市場経済、あるいはそれに規定される競争、とは次元を異にするわけである。

ユーゴの場合でも、とりわけ市場再分割戦による企業の軍団化と効率化が、労働者階級の管理や連帯への経験の促進や、そのための労働日短縮を促進することにプラスとはならなかったと考えられる。

ミルは「労働を確保するための競争が・・高賃金の源泉となっている」と語っているが、そういう局面もあるが、過剰生産と世界市場競争が深刻化しつつある今日それは色褪せてきている。

つまり資本の専制のもとでの労働手段・労働力の自由雇用（解雇）・自由使用と価格の自由設定（競争）をとうして、市場における価値実現如何と価格が決定され

る。又この市場価格による強制が資本による労働手段や労働編成や労働強度への専制を決定する、という形で資本主義は成立している。

これに対しユーゴのごとく労働者の企業への一定の発言権が全社会的に承認されている限り価格機構も一元的には機能しない。

各企業、管理者、労働者の全体を統一するのは全国的な労働者、生産者の大会なわけである。

そうした中で、品質、労働時間をめぐる競争と消費者（需要者）の点検が組織され、これら全体が自己統制のもとにおかれる。そしてこれら全体が管理を相対化するような労働組織や社会運動の形成や、管理・分業固定化止揚という社会意識のもとにおかれるわけである。

これらは一種のコミューン、すなわち各企業や、労働組織や、各人々の科学の発展・習得や、精神労働・肉体労働の分裂の止揚や、差別から自立する人々の支援や、農業と工業・都市と農村の分離の止揚といったことを射呈においた人々の連合（これをアソシエーションといってもよいのだが）ということになる。

（自由な個人と自由な労働力の使用）

⑨　次に　ａ自由な自立した人々の連合ということそれ自身に内在する、または前提する（自然発生的または意識的な形で）社会批判、変革の性格如何、という問題
ｂ「自由な個人」という場合、勿論それは直接には資本主義が生み出した「自由主義」「個人主義」を意味する。アソシエーション論が意味する自由な、自立的個人はそれといかなる点で区別するのか、あるいは批判、克服する契機をどこに見いだすのか。
ｃ諸運動体（政治闘争、経済闘争、イデオロギー闘争）をとうしてプロレタリア・人民は自己の利害を析出し見極めつつそれを一般利害・意志として表現してゆく組織をつくりだしてゆく。それは資本主義の下での労働過程といかなる関係にあるのか。
といったことが問題となる。

この問題はマルクス主義においてはまず自由な労働力の売買、従って自由な他人労働力の使用ということをどう考えるかということである。次ぎに市民社会と国家の分離、すなわち労働とか家族とかが私的活動と位置づけられ、それと形式的に分離した公的な事柄が国家の独占事としてことごとく集中したということである。すなわち住民から分離し、住民を抑圧する道具に転化することの問題としてある。同時に労働（労働力の使用）が私的であるのみならず資本主義的客観的運動に転化す

るとともに、国家が経済社会の矛盾の公的、意識的、階級的機構として人々に対し人々を抑圧している、といったことを論点としてきているわけである。

ここではまず田畑氏が「個人的所有の再建」ということをキーワードとしている点が検討される。そしてこのような個人（連合した）による物件化（資本主義的競争、分業等人々から独立した社会的機構）の服属ということを結論としていることが問題とされる。

それは前資本主義での自由な個人的私的所有、すなわち「分散性と細分性の枠内ではあれ、①自己労働にもとづく所有　②労働の対象的条件に対する主体的コントロール　③人格的自由や自由な個人性の対象的諸条件の所有」を歴史的論理的前提とすることから設定されている。

註）　同じ個的共同体的所有の再建を主張する平田清明の場合には個人的労働－所有なり市民社会なりという段階が存在したわけでなく、それの資本主義社会への普段の転変があるのだとしている。田畑氏の場合は第一段階（共同体）、第三段階（権力社会・資本主義社会）にたいし、第二段階（商品交換社会）を想定している）

それは私的かたちをとった他人労働力の使用・労働力の再生産、両者をふくむ資本主義的発展のあらわれを批判し、全社会的課題に転化するという問題を内在しているだろうか。あるいは「個人的所有の再建」の前提をなすような、自己労働にもとづく所有といった社会、時代、原理は想定しうるだろうか。

なるほど所有を労働の結果として位置づけたのはホッブス（リヴァイアサン－１６５１年）でありロック（市民政府論－１６９０年）だ、ということになっている。

マルクスが資本論で、「自己労働にもとづく所有の資本制的所有への転化」を比喩的に論じたことから、このロックの設定は自明のものとされるに到った。

しかしこのロックの主張は（主に土地所有について論じていることはさておき）「主人と僕という名称は・・いろいろ違った状態のものに対して用いられる」とした上で、「自由人は一定の期間を定めて労務を引き受け、受け取る賃金と引き換えに相手方に売る（「市民政府論」８５節）」というように、労働力の売買と他人労働力の使用・支配ということを前提としたものなわけである。

註）　そこで田畑氏が商品交換社会から資本主義社会への移行において価値形態の発展、貨幣形態を論じているが（Ｐ３８）、労働力の売買、他人労働力の使用・支配を問題にしていないことが問題となる。

(労働の富、所有、資本家精神への一元化)

⑩　この（他人）労働力の使用なり、そこでの労働組織（科学・精神諸力と細分化された労働の分業等）といったことを自由主義思想（ないし功利主義）なりが、とくに積極的に肯定しているわけでは勿論ない。

それは視野にないーすなわち所有・富が対象であり、労働は単なる過程でしかないわけである。

たとえばアダム・スミスの国富論が、国民の富、使用価値の増大を目的とし、そこで分析された分業は富ー生産性増大としてのみ位置づけれれたことは知られている。

あるいは労働は義務、禁欲、勤勉、蓄積といった資本家精神のもとにのみとらえられる。

イデオロギー、国家、分業、社会、科学・技術、欲求、苦悩、創造力がそれらと不可分一体のものとしてはとらえられていない。

（ただし自身の利益の追求が、他人の利益ー他人にとっての有用性ーを満たすことによって満たされるとか、その競争による生産性の改善とか、価格競争を起動力とする市場原理による需要・供給の統一と所得の増進とかの「自由主義」の効用が今日再強調されている。）

それはまた企業家精神、イノベーション（シュムペーター）へとも一元化される。

この勤労、禁欲といった労働観が企業家・資本家精神に一元化してゆくさまは、キリスト教と企業家精神の関連を追求したブルジョワ思想家、マックス・ウェーバーが証言している。

「この宗教的禁欲の力は、現世における財の分配の不平等が神の摂理のわざであり・・という安心すべき保証を与えた。すでにカルヴァンが『民衆』ーすなわち労働者や手工業者の大衆ーは貧しいときにのみ神に従順である、といっていることはしばしば引用されているとおりである。」「資本主義経済の基調の一つに関わるこうした定式化は、のち、さらに低賃金の『生産性』理論の中に流しこんでいくことになった（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」下Ｐ２３７）。

もちろんブルジョワ革命を実体的に担ったのは多くの場合貧農、都市下層民であったから「自己労働にもとずく所有」の観念はブルジョワ思想のうちに内在化されていた面は指摘できる。がそれはプロレタリアが追求する徹底した民主主義と、ブルジョワ民主主義への批判、との相互関係といった論議と共通するのである。

（だからたとえばフランスでは１７８９年革命来人権宣言が書き換えられてき、自

由・平等・所有・安全等がくりかえされてきた。が運動を反映して自由・平等・友愛・家族・所有権とともに、「労働」が１８４８革命になってはじめて掲げられてゆくわけである）

こうして労働は所有に一元化され、資本家・企業家活動に一元化されてゆくわけだが、この「労働と所有」の統一はむしろアメリカの開拓自営農民の一時期に実体的基盤をもったといわれる。それはさらに独立独歩、競争、成功といったことの理念化をもともない、アメリカ個人主義といったことをともなってゆくわけだが、しかし市場・資本家へと一般化されてゆくものであることをライト・ミルズが証言している。

註）ライト・ミルズ　１９６０年代アメリカニューレフトに影響を与えた。

すなわち彼によると、競争（市場）は非人間的機構ではなく「自由な個人を生み出す手段、英雄の試験台」と位置づけられた。が１９Ｃ以降「財産が集中されたため人間の本質的自由の基礎となっていた財産と勤労の調和は失われ」「所有者が自分のために使用する民主的財産にかわって、他人を雇って管理される階級的財産が出現した。階級的財産はそれが所有者の労働を規定するのでなくむしろその所有者に雇われる無産者の労働を規定する（ライト・ミルズ「ホワイトカラー」Ｐ１２）」とされる。

そしてこの自由主義・個人主義の挫折と企業家活動への一元化への過程について次ぎのように言う。

すなわち功利主義・ピューリタニズムとの関連では、「プロテスタンティズムは労働自体に内在的価値はなく、労働のよろこびと価値はその労働にたいする宗教的報酬にあると説かれた」とし、古典派経済学との関連では、「労働は国民の富を左右する要因となった。しかしこれは利潤の獲得を唯一の動機とする１９Ｃの人間の辛い労働に対する苦しまぎれの正当化であり、今や労働は霊魂にかかわりのない単なるビジネスになり下がった（Ｐ２００）」。そして「１９Ｃを通じて古典派経済学によって労働に付与された功利主義的意味付与を捨てて、ルネッサンスの豊饒に立ちかえろうとする努力が続けられた。トルストイ、カーライト、ラスキン、ウィリアム・モリスたちは過去に帰ろうとし、マルクスやエンゲルスは前進しようとした差はあるが、いずれも人間を道具の使用者とみなすルネッサンスの見解に立ち帰ろうとした点ではかわりはない（同）」と指摘している。

マルクス主義の評価や所有・労働の思想史そのものについては独自の研究がなされている。がこのような個人主義、自由主義、功利主義の歴史的分岐の指摘には鋭いものがありその中心（アメリカ）での結論といえる。

この個人主義の労働過程への不問と企業家への一元化は、次ぎのようなリンカーンの発言に明瞭となる。彼によるとリンカーンは次のように言ったという。「無一文だが分別のある人間はまず他人に雇われ労働して賃金を稼ぐ。そしてその金を貯えて独力で土地や道具を購入し、独立してなおしばらくすると最後には他人を雇用する身分となる」

そしてこの企業家は市場に一元化されるわけである。「市場は自由な個人を生み出す手段であり、英雄の試験台」であり「競争によって人々は文字どうり独立独歩の生活を実行していた。・・独立の個人が自由に競争することによって優れたものが勝ちを占め、人間の性格が向上してゆくのだと自由主義者は信じていた（Ｐ１０）」とされる。

（註）このアメリカ型個人主義は、ヨーロッパ型階級・貧困社会への批判をも経てきていることから、競争、独立独歩への機会の保証ということをもテーマとされてきたこと（インディアンから奪った土地の移民等への配分等）もあった。

これら開拓期アメリカ自営農民のユートピアは、資本主義工業化、独占、帝国主義、多国籍企業化と市場再分割戦の激化、アメリカ一元支配の崩壊と過剰生産・・といった中で挫折していった。ただしフロンティアと帝国主義はその個人主義を温存し続けた面もある。

すなわちその移民と開拓、分権、インデイアン征服、黒人奴隷化と差別、メキシコ割譲、フォードシステムと耐久消費財、帝国主義と選民思想（アメリカは・・世界における唯一の理想主義的国民であるーウイルソンー）、第二次大戦勝利と多国籍企業、・・そしていくつかのアメリカンドリームは資本主義、多国籍企業の現実を見すえぬ個人主義、機会均等の理念を温存してきた。

が大企業、独占のなかで前記引用にあるごとく「財産が集中されたため人間の本質的自由の基礎となっていた財産と労働の調和は失われ」た。さらに世界市場分割戦での後退、パクス・オブ・アメリカーナの後退、フロンテイアの喪失のなかでそれは「市民社会において成功しない人間は、かれら自身のなかに非難すべき道徳的遺伝的劣等性をもっているという保守的論理（民衆経済学センター『病める経済アメリカ』多賀出版）」を白人中産階級を中心に強め、階級分化と人種差別の促進につながっているわけである。そして多国籍企業と空洞化、大規模なダウンサイジング（首切）、三次産業化と階級分化（高賃金専門職と低賃金職種）が進行するなかで、多国籍企業とその労働過程を不問としたアメリカ個人主義の変形と挫折といったものが注目されるわけである。

しかし移民を受けていれていること、分権・連邦制、官僚機構の相対的弱さ等の

固有のブルジョワ民主主義の展開もある。そしてその条件に適合した１９９１年障害者立法ＡＤＡの衝撃、緑の運動等の独特の発展（市民発電所等）、労働運動・市民運動の戦術（ボイコット、地域）もある。

とはいえその社会的過程と労働過程（労働力の使用）とを結合してゆくという結果そのものは世界的に同じことになるだろうと思われるが。

⑪　こうして「労働過程と社会関係において自立し判断して行動出来るような個人あるいは人々の形成」ということを合意内容とするような社会の形成、ということが眼目であり、資本主義のなかからその条件をみいだしつつ、現実の資本主義ーその賃労働、国家ーとたたかってゆくことが共産主義運動だとしたら、歴史的根拠による「個人的所有の再建」というシェーマ自体は薄弱ということになる。科学・分業をふくむ労働過程を基礎とする社会過程を、どう抑圧の制度から人々の自立への制度へとかえるかが問題であって、その点において自由主義と論争してゆかねばならないからである。

（自由主義と功利主義）

⑫　こうして所有権と労働力の処分権、労働力を売る権利と他人労働力を購買・使用する権利、致富・生産性上昇への競争の自由といった自由と、これを護る政府といった制度的枠組に、内面的価値と道徳的義務を付与するものとして功利主義、自由主義が登場するわけである。

すなわち最大多数の最大幸福への各人の追求（＝功利主義）という主観的抽象性の枠組を設定しつつ、また数多くの功利のなかでも「好意、慈愛」を最大の功利性とするという抽象的主観的道徳という同じ枠組を設定することにそれはあらわれていった。（ベンサム「道徳および立法の諸原理序説」）

あるいは「個人は自分自身にたいしては、すなわち彼自身の肉体と精神にたいしてはその主権者である」「人間生活の中、利害関係が主として個人であるところの部分は個人に属するべきであり、利害関係が主として社会であるところの部分は社会に属すべきである（ミル「自由論Ｐ１５１」）という場合にも、同じ問題となる。たとえば資本の労働過程は個人に属するのか社会に属するのか不明にしつつ自由、個人、個性を展開しているわけである。

これら自由主義を補足する位置にルソーやヘーゲルがあるわけである。

(国家と個人)

⑬　田畑氏はこのルソーからマルクスは二つの点で自己区別しようとしたとしてａ経験的生活や個人的労働や個人的諸関係の中で・・諸個人が類的存在とならなければならないということである。これはマルクスにとって政治的解放と人間的解放の決定的分岐点であった　ｂルソーのいう固有の諸力が「自身だけで完全かつ孤立せる全体者」であるのに対し、「固有の諸力」を「社会的諸力として認識」するべきで「マルクスの市民社会は分業や競争や・・資本による実質的包摂などの自生的関係に構造化された社会である」（Ｐ６０～６３）、の２点をあげていて、それぞれ正しい。

が、まずａの「市民社会と国家の分離」ということの内容、すなわち私的、経済過程とその矛盾の公的、階級的、意識的解決機構とが形式的に分離したことによる人民のアソシエーションの独自の性格に触れていない（後述）。

さらにルソーが社会契約論で前提しているのは「各構成員の身体と財産を共同の力のすべてをあげて守り保護する結合の一形式を見い出すこと（「社会契約論」ｐ２９）」であり、社会契約によって「その統一、共同の自我、その生命およびその意志をうけとる」（その一般意志に人々は拘束され従属する）というように、ブルジョワ社会を前提にして人々の政治的団体ー共同の自我を問題にしているのである。すなわちいわゆる上部構造なり政治的レベルでのイデオロギー、ブルジョワ社会の総括、自己の階級利害の析出・意識化と一般利害化、自然発生性の目的意識性への転化等の領域なわけであり、市民社会の分業、競争、資本による労働の実質的包摂等の自生的関係を対置するのはすれちがいといえるわけである。

他方マルクスが直接闘ったヘーゲルは、自由主義については「国家が市民社会と取り違えられ、国家の使命が所有と人格的自由の安全と保護にあると決められるなら、個々人と個々人の利益が彼らの合一の究極目的であるということになり」と批判して国家＝客観的精神を対置したわけである（「法の哲学」２５８節）。従ってルソーにたいしても意志を国家の原理として立てた功績を認めながら個別意志から出てくる共同的なものを捉えたにすぎない、と批判している。

このヘーゲルの論法は絶対主義、国家主義的立場からの演繹である。ヘーゲルには「理性的共同体が必然的なものであり、共同体の法律を承認し、その共同精神を自分の本質と考えそれに従う人間が自由である（「歴史哲学講義」上Ｐ７４）」というようにそれ自体をとれば国家主義思想ともいえるわけである。

従ってマルクスはその「神秘主義」「主権問題」を批判しながらも、国家＝ブルジョワ社会の総括、支配階級の共同利害、特殊利害の一般利害への転化、階級支配の道具、土台に対するイデオロギー・上部構造・・・といった市民社会、ブルジョワ社会に対する国家、上部構造の独自の客観的性格を設定するという意味ではヘーゲルをひきついでいる面があるわけである。

それは、その市民社会と国家の分離への批判、すなわち「財産とか労働を社会的要素に高めないで、国家全体から完全に切り離し・・特殊な諸社会につくりあげた（「全集」１　ユダヤ人問題によせて）」ことへの批判的観点と不可分だたわけである。（ヘーゲル自身はこの所有、労働、職業団体による自由な個人の形成と客観的相互依存体系ということに完全に肯定的であり、かつそれを国家の基礎と把えていたのだが）

そしてこの点からさらに、イデオロギー、階級、全社会的課題、国家といった問題と、労働過程、労働力の使用（資本主義のもとでは所有、私的個人の自由のもとにある）とを結びつけざるをえないわけである。

そしてこの点において田畑氏のいう物件、すなわち分業や競争、資本による労働の実質的包摂などのすでに構造化された社会、ということの内容が問題となる。

というのは田畑氏が物件化ー流通・総過程や実質的包摂（相対的剰余価値生産）を問題としたことには独自の意義があると考えられるが、労働力の売買や絶対的剰余価値生産（資本による労働力の使用や、資本による指揮・管理や、剰余労働時間とその搾取や、労働者の時間の資本の時間への転化）が前提されていないわけである。

しかし資本による実質的包摂といっても、その具体的労働力の使用をとうして労働者階級の従属形態、自然発生的階級形成の内容も浮かんでくるわけである。すなわち（資本の流通・総過程支配や絶対的剰余価値生産と対になっての）、機械への従属、熟練の駆逐と労働者相互の競争・差別、労働強化や労働時間延長または交換勤務、科学の資本による占有と労働の細分化、労働の位階位制、相対的過剰人口と労働者相互の競争、階層分裂、といった現実が存在する。これらの前提でもあり結果でもある資本の蓄積（剰余価値生産・実現・資本への転化）や市場・競争や、これら資本主義社会の矛盾の総括機構であり、公的機能と武装力を集中した国家、等の総体の関係で形成されている労働者階級の自然発生性と目的意識性の相互関係こそがアソシエーションと言えるのではないかと考えられる。

註）それを無理矢理「自由な個人」という枠にとじこめようとする結果、たとえば「人格的個人と階級的個人」の分裂というシェーマを設定し、「現実的生活内容を奪われ、抽象的個人となってしまった（Ｐ８６）」というかたちで、現実の生産過程、労働過程のなかにアソシエーションの契機をみいだしえないことになる。後章

で展開される指揮管理や、固定的分業だとかは、同時に出発点であってはならない理由はないわけである。

それらは協同組合なりへ抽象的な自由な個人が連合して、だんだん過程的に資本主義の矛盾に直面してゆくという論理構造になっているからではある。

しかし自由な個人という場合には直接的には資本主義が生み出した自由主義的個人を意味している。がある意味ではそれが前提し、ある意味では回答しえない資本主義的労働過程や生産過程とその国家の問題点（契機そのものは戦争、反動、労働力の使用、賃金、失業、差別、・・等多様であり労働組合、協同組合もそのひとつだが）をつきだし、議論し、闘い、或いは社会関係を作り出すことのなかからわれわれのいう近代的個人は形成してゆくわけである。

バックナンバー

No.2　レギュラシオン理論について
No.3　国家論（プーランザス）
No.4　グラムシ
No.5　フォードシステム（ブレイバーマン）
　　について
No.6　ロシア革命（ベトレーム）
セレクション（No.1－No.6）
No.7　主体性論の総括
No.8　現代帝国主義について
No.9　資本主義と南北問題
No.10　オウムと宗教
No.11　民族問題について
No.12　ラテンアメリカの運動

研究会報　No.13　200円

発行日　1998年6月
連絡先　◇東京都北区西ケ原1－17－9
　　西ケ原レジデンス203　十月社気付
　　TEL　03－3576－0748
　　◇東京都新宿北郵便局私書箱2011号　現代思研気付
　　TEL　03－3485－6736
　　◇東京都豊島区西池袋2－38－6
　　第一後藤ビル　豊島文化社気付
　　TEL　03－3981－2887
　◇京都市中京郵便局私書箱101号　創流社気付